

700 Fukushima Mothers Speak

—— 2014 年アンケート調査の自由回答にみる
福島県中通りの親子の生活と健康 ——

成 元 哲
牛 島 佳 代
松 谷 満

『中京大学現代社会学部紀要』 第8巻 第2号 抜刷

2014年11月 PP. 1~74

700 Fukushima Mothers Speak

—— 2014年アンケート調査の自由回答にみる

福島県中通りの親子の生活と健康 ——

成 元 哲
牛 島 佳 代
松 谷 満

1 問題の所在

2011年3月11日の東日本大震災及びこれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故（以下「福島原発事故」）は、福島県中通りの子ども及びその母親（または保護者、以下「母親」）の生活や健康にどのような影響を及ぼしているのか。

放射能汚染の長期持続性及びこれが引き起こす社会的、公衆衛生的帰結という点で、放射能災害によってもっとも「傷つきやすい集団」は子どもである。とりわけ、福島県中通り地域は「避難区域外」とされ、放射能リスクへの対処が個人の判断に委ねられてきた。また、同地域は、避難区域に隣接する地域として滞在する人が多数を占め、放射能不安とリスク対処行動をめぐるコンフリクトが発生しやすい場所でもある。その結果、福島県中通り地域に居住する子ども及びその母親は、福島原発事故から3年半が過ぎてもなお、外遊びや食生活での制約、放射能をめぐる考え方や対処の違いによる人間関係の亀裂など日常生活における不安を抱えながら暮らしている。このような放射能に対する不安は、原発事故という異常な事態によって生じた正常な反応である。

そこで、われわれ「福島子ども健康プロジェクト」は、福島県中通り9市町村に住所のある2008年度出生児（6191名）及びその母親を対象として2013年1月と2014年1月に、それぞれ、「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」（以下「本調査」）を実施した。本調査は、同一世帯における同一の子ども及びその母親を追跡調査し、家庭や地域をめぐる状況と子どもの生活や心身の健康との関連を——他の地域と比較しながら——明らかにすることによって、原発事故の影響を特定し、子どもたちが健やかに成長することのできる生活環境を整えるために必要な施策を提案することを目的としている。

本稿では、2014年調査の自由回答欄に書き込まれた母親の声に着目した分析を行っている。とりわけ、2013年調査の自由回答分析¹との比較において変化の部分に焦点を当てている。2014年調査の自由回答欄には多種多様な意見が寄せられているが、大枠としては2013年調査と共通していた。そこで、本稿でも2013年調査と同様、母親の意見を①生活拠点、②（食）生活、③家計、④子育て、⑤人間関係、⑥情報、⑦賠償・補償、⑧健康の8つのカテゴリーに分類した。次の2-9は、これらの8つの分類項目ごとの意見及びその特徴を記述し、10は、本調査に対する調査対象者からの意見を整理した。最後の11は、全体を踏まえた考察である。本稿で取り上げる自由回答は、2014年の上半期の時点での意見であり、その後、こうした意見や状況が変化している可能性がある。なお、本稿での自由回答の掲載方針について示しておきたい。第一に、上記の分類項目に該当する意見を網羅的に掲載するようにした。ただし、個人が特定できる情報は掲載を見送った。具体的には市町村名、大字名の単位では個人が特定しにくいので掲載するが、それより小さい単位は掲載を見送った。その場合は、同じ趣旨の意見で個人が特定しにくい意見を掲載した。第二に、自由回答に書き込まれた意見はすべて手書きである。したがって、誤字・脱字が多いが、なるべくそのまま掲載することにした。

2 生活拠点

(1) 避難関係

生活拠点のうち、避難に関する意見は①「避難継続中」、②「避難したが戻ってきた」、③「避難したいができない」、④「避難しない」の4つに分けられる。

ア 避難継続中

避難を継続している家庭の中には、家族と離ればなれになることへの不安、家計負担の増加を指摘する声があった。

- ・「夫の転勤に伴い、福島県から兵庫県に引越しました。ここでは子育ての環境が良く、公園で外遊びを心おきなくすることができます。子育て面に関しては、引越してきて良かったと感じますが、両親（私らの）やたよれる人は近くに居なく、また友達など心おきなく何気ないことをしゃべる相手が居なく苦しい時もあります。又、環境や言葉の違いにかなりとまどいました。子供を守る為に選んだ選択でしたが、淋しい時があるのも現実です。元の福島に戻ったらまた福島に住みたいです。」
- ・「山形に避難して2年が過ぎました。・・・同じように母子避難をした家族もどんどん福島に戻って行きます。帰りたくないけど、子供の心の事を考えると家族離れ離れの生活はもうできないとの理由が多いようです。私達も借り上げ住宅が終了する来年度末までには戻る予定です。」
- ・「現在は、夫を郡山に残し、母子3人で新潟県で自主避難をしています。福島にいる両親の事や私自身、体に障害（下肢4級）があるので、子供2人を連れての避難はとても辛いです。」
- ・「現在県外に家族で避難中だが、これから先、福島に戻るか未定。子供の事を考えると（現在ではなく将来の健康のこと）戻りたくないが、自分の両親、兄弟が福島にいる為自分は戻りたい気持ちも

ある。実際のところ、放射能の影響はあるのか・・・かくさずに本当のことを、教えてほしい。少しでも影響があるとわかれば、やはり戻りたくはないので・・・」

- ・「避難してきてから3度流産しました。先生には福島に戻れば落ち着いて流産もしないかもねと言われました。しかし今の状況で福島に戻れば、2人の子どもの健康が不安です。」
- ・「自主避難では、経済的苦労が大きいです。福島へ帰省する際の移動費も大きいです。地震発生から時間が経ち、支援の打ち切りが迫っているので、私たちは、今以上の不安を抱えていくのが怖くなります。」

逆に、避難してよかったという意見もある。その理由としては、生活環境の改善、福島との状況との比較が指摘されている。

- ・「平成25年4月に、私の実家のある新潟市に自主避難しました。息子の甲状腺に異常が見つかり、もう郡山で子育てすることは難しいと感じ、夫に頼んで会社を辞めてもらい、新潟で再就職してもらいました。放射能に対するストレスも減り、息子も毎日元気に遊んでいます。私の親、兄弟も近くにいるので子育ても本当にラクになりました。時々、主人の実家（郡山）に行きますが様子は変わらず・・・。思い切って引越してよかったと思っています。」

イ 避難したが戻ってきた

避難したが福島に戻ってきたとの意見がある。その原因としては、家族と離ればなれになることへの不安、家計負担の増加、家族の体調不良、意見が対立したが押し切られた等がある。

- ・「震災後、母子で避難しました。主人は仕事もあり、郡山に残りました。1年位自主避難していましたが、子供にとっては何故父親と離れなければいけないのか、なぜ郡山にいられないのか理解することができませんでした。父が会いに来ると帰り際を悟るように父が

ら離れなくなり、その姿を見るのが辛いものがありました。避難生活を終え、約2年経とうとしています。子供には、『また離れて暮らすのでは?』という不安がぬぐいきれておらず、いまだに仕事で見送る時、泣き止まないこともあります。』

- ・「震災があった年の5月に線量の低い場所へ避難しました。2年ほど生活し、夫が体調をくずしました。原因は避難先→職場への通勤(往復2時間高速利用)に疲れ果て、ストレスがたまったためでした。夫の体を考え、職場の近くへ引っこしました。引っこし先は、震災時、住んでいた地域とは別の場所です。」
- ・「子供のため自主避難していた約2年半、収入も半減している中で二重生活は苦しかったです。」
- ・「私は事故後すぐ、少しでも線量の低い所へと思い、私の実家の会津若松の方へ避難していました。2年がたち3年目に入りました。私は当然、線量が低くなるまで帰らないつもりでした。それが子供の健康のためとっていたからです。しかし、夫や夫の両親『郡山、全然大丈夫だから帰ってきなさい』と。私は何が全然大丈夫なんだろう? 会津より、郡山は倍の線量があるのに・・・今体に何もなくても、将来何かあるかわからないのが放射能なのに・・・何を言ってもわかってもらえず、私が1人だだをこねているように思われ、泣く泣く、2013年8月に郡山に帰ってきました。」

ウ 避難したいができない

避難したいができないという意見がある。その原因としては、家族と離ればなれになることへの不安、家計負担の増加、仕事、家のローン、環境を変えることへの不安、親族への後ろめたさ、何かと調査・検査の対象となり面倒等がある。

- ・「今現在、様々な理由で福島をはなれず(自分が今住んでいる地域も含め)生活し「放射線のことだけではないと思うが、毎日経済的

不安がある。県内での賠償の違いなどを見ると、それなりに線量があっても避難できない。いまさら避難??と思われることもあるかもしれないが、少しでも時間、お金にゆとりがあれば福島から離れる時間がほしい。」

- ・「他県に移住するのは、持家の人には難しい事でした。また他県に移住した人は、自分だけ逃げたのか的な目で見られ、戻りずらくなっています。」
- ・「生まれ育った地元での生活を捨てて、子供と自分だけが避難することはやはり選ぶ事ができず今に至ってます。・・・住み慣れた場所をはなれるのは簡単な事ではありません。」
- ・「地震があった日、同市に住む姑さんが心配して迎えに来てくれて夫の実家でお世話になっているのに、自分たちだけ避難なんてできませんでした。(姑さんは避難しないとっていました。)・・・避難するかどうか迷った人、避難したくてもできなかった人等他にもいると思います。」
- ・「遠くへ離れるにしろ、別の環境を求めた所で、金銭的にも苦しい状況だし、新転地でまた新たな生活を・・・とも思いますが、子供同士の友人関係(慣れた環境で子供を伸び伸び生活させたい。気心の知れた子供達の姿を近くで見たい)をこわしたくない所もあり、何ともやりきれない思いです。」
- ・「地方公務員のため、仕事柄、災害時は出勤のため子供のそばにいてあげられない不安感、逃げたら、同じ職場の夫、町内の両親に向けられる回りの目を考えると子供と逃げられなかった絶亡感が蘇ります。本当に、本当にこれでよかったのか・・・。」
- ・「経済的にも一家で避難することは不可能であり、また母子のみで避難しても、少なからず家族関係に影響が出るだろうし、子どもにとって家族がバラバラに生活することは、よくないと考えている。毎日、色々な葛藤の中で生活している。」

- ・「私は、避難できなくてできませんでした。夫は理科の先生をしていて、『この線量なら全く問題ない』と相談することもできませんでした。また、私自身仕事をやめての避難には踏み切れませんでした。結局、消極的選択として、避難は選ばなかったのです。」
- ・「震災直後は線量はじめ、食べ物など色々と気になっていましたが、自宅の住宅ローンなどをかかえ、引越も叶わず、今現在は小学生の息子が引越はしたくないなどの理由も出来、しばらくは現在の住まいでの生活しか出来ないかなと思っています。出来るならば県外での生活を望みますが、あきらめています。」
- ・「放射線の不安が全くないわけではありませんが、慣れ親しんだ土地を離れる勇気はありませんし、経済的な余裕もありません。さらに、子供の環境を変えたくないし、サポートしてもらっている人たちと離れてやっていけるのかという不安もあり、避難は考えていません。」
- ・「夫はここに残ることを決め、父親と離れて暮らすことが本当によいことか、県外に頼れる身内もおらず、自分一人で2人の子どもを連れて避難するということには不安があり、ふみきれませんでした。」

エ 避難しない

避難しないという決意を表す意見があった。

- ・「保障や避難など全く期待はしていません。この先も今の場所で子供が楽しく生活できるよう親として一生懸命やっていくだけです。子供が大きくなり色々なことが分かるようになってから、何を考え、何を言われるか不安はあります。親として何が一番いいのか・・・分かりません。」
- ・「放射線の不安を持ちながらも、でも自分の育ったこの地で育ててあげたい。この3年（震災後）でこの思いが強くなったように思い

ます。』

オ 特徴

2013年の自由回答と比較して、避難継続中のうち肯定的な意見が増えた。また、避難しないという決意を明確に示した意見も増えた。しかし、避難継続中のうち否定的な意見、避難したが福島に戻ってきたという意見、避難したいができないという意見は依然として多く、避難をめぐる葛藤は続いている。

もっとも、避難に関する意見の総数は155件(2013年)から66件(2014年)に大幅に減少した。逆に、除染に関する意見は41件(2013年)から108件(2014)に大きく増加した。アンケート対象者の関心は、「避難」から「除染」へと変わりつつある。避難には様々な問題があり、生活拠点を移す選択ができないので、その代わりに、除染への関心が高まっているものと考えられる。

(2) 保養関係

保養に関する意見は、①「保養プログラムの拡充を望む」、②「保養に関する情報を得たい」、③「保養に満足した」の3つに分けられる。

ア 保養プログラムの拡充を望む

保養プログラムの要望や不満に関する意見があった。例えば、プログラム数数の増加、対象者の拡大、保養内容、不公平感等である。

- ・「障害者の子供がいるが、正常な子供には、学校からいろいろなキャンプや遊びにつれていってくれるチラシを持ってくるが、自閉症の息子は参加できるプログラムがなく、是非障害者の子供を中心とした遊びの活動のキャンプなどの開催をしてほしい。」
- ・「とにかく保養を増やしてほしいです。小学生は大人と同じように料金がかかってしまい、経済的に大変で参加しにくいという意見を

よく耳にします。みんな大きく心と身体にストレスを抱えているので、そのための保養です。みんなが保養できるスタイルを確立していただきたいと思います。」

- ・「短期保養への支援をお願いします。シングルマザーは経済的にも時間的にも厳しく長期保養へ出かけられません。」
- ・「保養のシステムをもっと県外にも広めてほしい。青少年自然の家のみならず、ユースホステルやYMCAなど各地のガイドや心のケアもできる人々のいる保養しせつへ家族単位で、行けるようにシステム化して欲しいです。小さい子のいる家庭、障害のある子のいる家庭、土日が休めない両親のいる家庭の子が長期の休み等で各自、動けるようにして欲しいです。」
- ・「子ども達を保養につれて行きたいと考え1人で2人の子どもを連れて行っていました。今、妊婦になり難しくなってしまう不平等に感じてなりません。行ける人だけがたくさん参加でき、今、妊婦の私自身も保養が必要だと思う中、行くこともできません。旦那に仕事を休まれては家計も苦しくなります。」
- ・「もう少し身近で、家で、生活の一部で、心身のリフレッシュ、ケアが出来るとうれしいです。」
- ・「長期休暇を利用して県から補助が出る『福島っ子応援事業』が毎年縮小されてきていて、放射能の低い地域へ出かけることが困難になりつつある。以前よりまわりの環境も放射線量は低くなってきているものの、震災前のように子供達を長時間遊ばせるのには不安があるので、この事業はぜひ来年度も継続してほしい。」
- ・「家のローンさえなければ、仕事をやめ、子ども達と保養に行きたい気持ちでいっぱいですが、保養も長期や平日のものが多く、参加できないのが多いです。仕事をしている人ほど、不利に感じるのは私だけでしょうか？もっと働く親の為の保養企画があると嬉しいです。」

- ・「今、私が望むことは、子供達の強制保養です。小学校のクラス単位でいいので、1週間~1ヶ月行けたら、かなり体はリセット出来るはずですよ。お金のある子だけが受けられるのではなく、子供達の権利として確立して欲しいです。」
- ・「福島で子供を育てるママ達はまだまだ不安だと思う。その為にすこしでも県外で出かけたりする・・・けど、出かけるのにもお金はかかる。もっと無料で利用できる保養を増やしてほしい。日帰りでもいいのでしてほしい。自分も見つければ応募するが、結果不採用で行けず・・・。親も親で毎日辛い・・・。親へのリフレッシュも考えてほしい。」

イ 保養に関する情報を得たい

保養に関する情報にアクセスすることができないという意見があった。

- ・「保養をたくさん知りたいけど、調べようがないのもっと学校や幼稚園を通して、手紙などで募集してほしい」
- ・「週末や短期間だけの保養に興味はあるのですが、どこから情報を得るのかも分からず、また何か見つけてもどのような感じの所へ行って、何をするのか、分からないと不安で参加できずにいます。市町村が企画したものでしたら安心して行けるのにな、と思います。」

ウ 保養に満足した

保養に参加した、あるいは参加予定の家庭は、保養に関して肯定的な意見を述べている。

- ・「今月末から沖縄・久米島福島の子どものためのプロジェクトで10日間保養に行くことになっています。子ども無料、保護者は交通費のみで10日間楽しんできます。このような取り組みを行っていることに感謝です。福島のことを気にかけて下さっている

方がたくさんいるって幸せなことです。のびのびと遊べると思うと親子共楽しみでいっぱいです。このような機会がいろいろあったら楽しく前向きに生きていけると思います。」

エ 特徴

保養に関する意見は2013年に引き続き多い。これは、子どもの外遊びを制限する状況が続き、親子ともにストレスがたまっていることを反映している。保養プログラムに対する要望が多く、保養機会が不足している、または、その機会が減っていることに対する不満が指摘されている。

保養情報については、何らかの理由により情報にアクセスすることができないという意見が引き続きみられた。こうした意見の数は2013年より増加している。情報の伝達方法も工夫する必要がある。

(3) 除染関係

除染に関する意見は、①「除染にある程度満足している」、②「実施された除染に不満がある」、③「除染を望む」、④「(実施の有無にかかわらず) 除染の効果に疑問がある」の4つに分けられる。

ア 除染にある程度満足している

まず、除染によってある程度、安心感を得たという意見から確認しておこう。

- ・「家の前の除染もやってもらいました。線量はあまり下がりませんが、とっても丁寧にやってもらったのでありがたいです。」
- ・「震災後3年近くたち、学校・幼稚園などは除染され、以前のように外遊びもできるようになりました。私たち大人も、以前ほど放射能の測定値を気にすることもなくなり、以前の生活に戻ったと思います。」

イ 実施された除染に不満がある

次に、除染に対する不満を確認しておこう。例えば、除染方法のずさんさ、除染後の処理方法、除染後の放射線の数値等である。

- ・「除染したとしても家の敷地内に埋めるという事で、どうしても子どもの将来の身体が心配です。」
- ・「除染ですが、近くの公園で、穴を掘り、土をうめる大がかりな除染がされましたが、なぜか0.01 μ S/h数値が、あがってました。効果のない除染に大金をつぎ込む市。・・・」
- ・「家の近くでも除染はおわりましたがやる順番か違うんじゃない？と思うところがあり、(庭や、駐車場の後→屋根をする)業者が違うらしいですが、そういうのをみていると大丈夫？と思います。」
- ・「そして除染の進みの遅さ。まーこれが何か意味かあるのかってのもギモンですが、公園も除染済と立てかんばんはあるものの、草はボーボー土はそのまま、木も散乱・・・除染じゃないよね？という状況をよく見ます。実際この公園は0.10 μ msvと書いてありますが子供が好きそうなベンチ、すべり台の下、草の中などは、0.6マイクロシーベルトあたりと、全くてきとうな事になってしまってます。」
- ・「除染のやり方に不満を感じています。昨年5月に住宅除染をやって頂きましたが、がちり足場を組んだのに屋根は何もせず雨どいをきれいにしただけ。家裏の土手(斜面)は雨などで崩れるといけないからという理由で表土も削らずただ草を取ってきれいにしただけ。これで除染と呼べるのか疑問です。また除染をしたのはほんとに家の周りだけ。我が家しか使っていないスロープがあるのですが、そこは県の土地なので、今だに除染は何もしてもらっていません。そのスロープのアスファルトにヒビが入っている部分は高い時で5マイクロシーベルトありました。(現在3.5マイクロシーベルト)。子供達が通園、通学で毎日通っている所です。住宅除染はす

すみませんが、住宅地と違ってうちみたいに山間地に住んでいる人はまだまだ不安だらけです。除染された面積を地図上からみればほんの点にすぎません。周りは常緑の杉や竹だらけで、そこから飛んできているのではないのでしょうか。実際、家の周りの線量は、除染してすぐよりも上がってきています。山の除染なんて、可能なのか。このままガマンしろということなのか。考えだすと不安で頭がおかしくなりそうです。」

- ・「マンション周辺で除染作業が始まり、以前より線量が下がり、喜んだのも束の間、マンション周辺から出た汚染土が私の家（1階）の目の前に置かれました。窓を開けると大きなブルーシートがあるので、除染後は洗濯物を外に干さなくなりました」

なお、除染作業員に対する不満もあった。例えば、プライバシー侵害のおそれ、作業員の身なり、不祥事（空き巣やケンカ等）等が指摘されている。

- ・「除染をしている地区の庭に、汚染土を削ってくれる業者さんたちが沢山入って、作業しているのを見るのがよくあるが、信頼できる（私有地に入って、あちこちくわしくつくりをみられてしまうので、）人たちなのか、非常に非常に不安である。というか、信頼できる、と言える人は少ないと思う。市の委たくで全くの他人が、私有地に入出入りするのこわい。実際、郡山市で、除染作業員によるゆうかい事件が昨年おきている。そのニュースをきいて『ほら・・・』と感じた。除染の必要性を強く感じる一方で、作業をしてくれる方への不信感が大きいのが現実です。知っている業者さんに頼んでもよい、ということにしてほしい。」
- ・「除染はありがたいですが除染活動をしてくださる方々の行動（空き巣やケンカなど）が怖く除染活動をしてもらうのに低抗があります。他県からお給料目当てでくるのはやめてもらいたいです。失礼

ですが見た目にもガラが悪くマナーも悪い。」

- ・「除染がすすめられているが、作業員の不祥事が発生していて、除染作業員の逮捕数も去年70人近くいるとTVのニュースで見ました。除染作業内容についても正しくやっているのか信頼できない。」

ウ 除染を望む

除染を早くしてほしいという意見があった。家庭のほか、学校・幼稚園、通学路等、生活圏内すべての除染を望む意見が多い。

- ・「一日も早く、丁寧な除染をして、案心して、ずっと外で遊んだり、土やこけなど、子供が、触れては、いけない環境をなくしてほしいです。」
- ・「早く全ての除染を終わらせてほしい。県立図書館の駐車場の植木周辺に黄色テープが張り巡らされている所がある。子供がどう思っているかはわからないが、親としては、行く為に、近づいてはいけないことを説明し、3.11を思い出してしまう。除染も優先場所や地域などがあるのだろうが、せめて、人が集うような場所は、早い対応を願いたい。」
- ・「私の住んでいる地区には、信夫山という山があり、今でも、放射線量が高く不安です。又、すぐ目の前には、東北新幹線の橋げたがあり、原発事故後も、何の除染もされておらず、線路から流れ落ちる排水、排水口の線量がとても高いです。そのため、外で遊ぶ事ができません。新幹線のレールとなると、とても区域が広いとも思いますが、少しずつでも除染してほしいと思います。」
- ・「この地区も線量的にはけっして低くはなく、家や庭の除染をしても0.3~0.5くらいはあり、あるいみ避難地区よりも、高いところもあつたり・・・よく分からない状態で、よけいに、ストレスになるのだと思います。年間、1ミリシーベルトを超える地域には何らかの賠償なり、除染をてっついするなりしてほしい。これからは、

線量によって、分けてほしい。』

- ・「早く除線してほしい。市町村によってスピードがちがう。一軒一軒に、除線費用を出して、各自で除線したらよい。早くおわり、手抜きもしないはず。』
- ・「定期的な除草や除染作業が行われているのは良いのですが、全ての公園を同時期（期間）にではなく、どこか1つでも完了している公園があれば広報なり新聞などで告知してほしい。現状は難しいのかもしれませんが。』
- ・「庭の除染を実費ですぐに行った。←補助なし。現在、国？県？主体の除染がようやく準備段階。遅い。福島県に住まないとわからないですよ。せめてそのくらい早くやってほしかった。（そこにお金を使ってほしかった。）」
- ・「私達は賃貸住宅に住んでいますが賃貸住宅は対象では無いようです。賃貸住宅ですが、植木や土もあります。子供達はそこでよく遊んでいます。なので心配してます。賃貸住宅には若い世代が沢山住んでいますので、この先、除染対象になればいいなと思っています。』
- ・「先日、庭の除染作業をしていただいたのですが、0.3以下を目指しているみたいですが、作業後も線量の高い所は、0.5もあるので、なんだか不安です。やっと庭に子供を出せるかと思ったのですが、やっぱり線量が高い所は、溜まりやすいので、変わらないようです。1回きりではなく、今後も定期的に庭の除染をしてほしいと思いました。』
- ・「除染については市の方針でエリアごとに 線量の高い地区から優先的に作業を進めているようですが、主に大人が利用する夜の飲食店街、月極の駐車場などの除染（線量の高いエリア）よりは小さい子どもが生活している個人宅を優先して除染すべきだと思います。一部の線量だけでエリアの除染の優先順位を決め、機械的に作業を

進めている行政に不信感がつのるばかりです。道路一本へだてて向こう側は除染しているのに、自分たちのエリアは来年度の作業・・・数メートル場所が違うだけで除染作業が一年も先のばしになるなんておかしいです！もっと臨機応変に、きめ細やかな対応をしてほしいと思います。」

- ・「3年たった今も、目の前にある公園は除染はされていません。その他の公園は、すぐに除染をしてくれたのに。除染しない理由を聞くと、伊達市のもちものの公園は除染してくれたのに、私のすんでいる目の前の公園は福島県の持ち物だからだそうです。」
- ・「実家の隣の家のことなのですが、家だけそのままあって、住んでいる人が居なく、(市や県)町が連絡を取ることが出来ない為、勝手に除染をすることが出来ないと言われた。しかし、実家と隣の間には、放射能が高く、子供達を連れて行って外で遊ばせることが出来ない。どうにかして欲しい。」

エ (実施の有無にかかわらず) 除染の効果に疑問がある

除染の効果を疑問視する意見もあった。

- ・「放射能に関しては、あきらめもありますが、全くと言っていい程気にしていません。除染はこれから市で入る予定ですが、行っても意味はなく、あきらめています。」
- ・「除染作業は意味がないと、除染業者が言っています。」
- ・「除染がいろんな所で進められていますが、効果があるのでしょうか。人件費ばかりにお金をかけて、見ているほうが嫌になります。また、数値はもどりますよね。」

オ 特徴

避難することができない家庭、あるいは、避難しない家庭にとって、除染は放射能に起因する不安を解消する数少ない方法の一つであることが

ら、除染に対する関心は高まっている。除染の実施は2013年より進んだようであるが、「除染を早く進めてほしい」、「除染を望む」という意見がなお多数を占めており、除染のスピード感は全体として「遅い」と評価されている。

2014年になって除染を「定期的に行ってほしい」という意見がいくつかみられるようになった。一度、除染をしても、線量が元に戻るなどの問題が生じていることが伺える。また、除染作業員に対する不満が指摘されるようになった。空き巣等で逮捕者まで出るような事態になっており、住民の不安を増幅させている。

3 (食) 生活

(1) 食

食に関する意見は、①「地元産の食材や水道水はできるだけ使わない」、②「地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている」、③「学校(保育園)給食に対する不満」の3つに分けられる。

ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない

食に関しては、他県産の食材やミネラルウォーター等を(高くても)購入しているという意見が多かった。その理由としては放射能・子どもの健康が指摘されている。また、その結果、家計負担が増加したことが指摘されている。

- ・「子供達の水を買う家庭がほとんどです。福島の水は、以前とてもおいしかったのに今は、スーパーやクリクラなどの水で生活をしています。年間186,000円が水代に消えます。」
- ・「主人の母の所に身を寄せましたが、食物の産地にピリピリしていた私に偏見の目が。子供を守ろうとして必死だったんですね。全部実費で、買い物して、お礼して身を寄せてました。」
- ・「子供の飲む水は、買ってきたものを飲ませています。近所の畑を

見ると安全と言われても野菜、果物を口にする気にはなりません。原発事故のせいで、魚を食べる機会も減りました。子育て時代に食べ物のことで悩まなくてはいけないのが一番つらいです。」

- ・「私の祖母と同居のため、近所の人が野菜やみそ、米などをくれますが、食べていません。祖母だけ食べています。このことはくれた本人も知っており、いつも気まずい雰囲気です。いくら検査済みと言われても、10ベクレル以下は『検出せず』と出るだけで、小さな子には与えられません。実の親も最近では自家製野菜を検査して持ってくるので、ストレスでいっぱいです。」
- ・「私の楽しみの一つだった直売所で買う野菜を使う料理も、放射線が少しでも入っているとこわいので、地元の野菜を避けてしまい、割高のしかもあまり新鮮ではないものを使わざるをえません。」
- ・「経済的な部分も、未だ毎月赤字で苦しいです。免疫力を上げるために、無添加（一般のものよりも高値）、有機野菜、ネットにより西の玄米のとりよせ・・・など。」
- ・「地産地消を進めてくるけれど、心配で手が出せません。けれど、その横に置いてある他県産は値段が1.5倍で・・・新鮮な野菜をたくさん食べるべきか、安全な野菜を少量食べるか。本当にストレスです。」
- ・「スーパーで売られている物はほとんどが野菜は東日本産、魚は太平洋側産と避けたい食材ばかり、買い物にストレスに、流通している食材も実は危険と知り、とても怖い。」
- ・「震災前はパッパ！と食材をカゴに入れ、スピーディに買い物を済ませておりましたから、いちいち、産地を見て、買うことをためらうという日々のくり返しは、思った以上のストレスとなっていたといえるかもしれません。きっと他県の方々にはピンとこない話でしょう・・・。」

イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている

地元産の食材や水道水を使っているという意見の中には、健康に対する不安を指摘するものや、食材の流通事情や家計の事情で仕方なく地元産の食材や水道水を使っているというものがあつた。

- ・「地元の野菜は食べれても、(経済的に苦しいので子供用に) 飲む用の水は購入している。」
- ・「やはり、健康の事が一番気になる。ガンになりやすいのかとか心配です。食べ物も心配です。地元で作っている物とかを近所の方にいただいたりすると、本当に安全なのか、不安に思ってしまう。ついついもったいないと思い、子供にも食べさせてしまう時があります。」

ウ 学校(保育園)給食に対する不満

その他、学校給食等、子どもの家庭外の食事に関する不満を述べる意見が相当数見られた。その理由としては、地元産の食材や水道水の使用が指摘されている。

- ・「学校給食など、すでに福島県産の食材が使われている。検査もされていて安全とは言われているが、親として、今だになるだけ子供には安全なものを、安全なことをとって過ごしている(食材は産地を気にして値段が高くて県外産のものを買ったり、むやみに土や石、植物をさわらせない、休日はなるべく県外でなど)のに、情情的にむくわれていない気がする。」
- ・「一番気にしていることは『給食』です。県や市はならば地産地消をすすめています。子供達を『安心安全の道具』にしないでほしいです。(給食に使用している、と言えば売れるみたいな話をきいたことがあります。子供が食べて大丈夫なら、ってことでしょうか。)福島県庁の食堂では『1Bg/kg』、給食では『10Bg/kg』が検出限界値です。逆じゃないの?とってしまいます。(1Bg/kgなら今よ

りは少し安心かなと思います) 外部ひばくはある程度あきらめました。(ここに住むには) ここでできるのは内部ひばくをとにかく減らすこと、だと思っています。検査して10Bg/kg以下の米しか使用しないから安心、と市では言いますが、9.9Bg/kg入っているかもしれない米を毎日子供に食べさせたくありません。郡山市では給食の食材は米、野菜等、地元産使用しているみたいです。本宮市では米のみ市内産使用。(牛乳も県内産) 市町村によって差はあるみたいです。県内産の食材を使用すれば補助金が出る、と新聞でみかけました。(県からか国からか不明。忘れてしまいました)(少し前ですが) 近い将来、地産地消になりそうで怖いです。気にしてない方や、検査してない関東産より安全という方もいらっしゃいますが、ならば限りなく0(ゼロ:著者)に近い所の食材を使って『より安全』にしてほしいです。子供を守ってほしいです。最悪、お弁当も考えていますが、他の子供の目もあり、お弁当持参もむずかしいのが本音です。(気にする子なので)」

- ・「同じ市民ですが自主避難=神経質な人という認識をされ、非常につらい思いです。給食の米を福島市産のものにかえたり、米の検出限界値25Bg/kg(会津米)にしたり、風の強い日も屋外活動に配慮しなかったり・・・。小さな子をもつ親としては、心配してしまうのですが、大多数の在住の方々は、震災前と同じようにされています。」

逆の意見も極少数だけが見られた。

- ・「給食の食材も県外から空輸しているようなので、私個人としてはそこまでもうしなくてもいいのでは、と思っているところです。(その分コストもかかるでしょうし・・・)」

エ 特徴

「ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない」、「ウ 学校(保育

園) 給食に対する不満」については、2013年から2014年にかけて、回答数と回答内容に変化はみられなかった。一方、「イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている」の回答数は10件(2013年)から2件(2014年)に減少した。これらの意見からもわかるように「原発事故後の生活変化」のうち、地元産食材を使用する人が増えている。

加えて、このアンケート調査の他の質問項目に「地元産食材を使わない」と回答していた人が「事故直後」は回答者全体の9割を占めていたが、「事故3年後の2014年」にはそれが約4割に減っている。ただ、今も4割の人が「地元産食材を使わない」ということは、食による内部被ばくの不安を強く感じており、実際そのリスクを避けるべく行動をとっていることを意味する。

(2) 洗濯

洗濯に関しては、外干ししていないという意見が見られる。

- ・「個人で家や家の周りの除染をする手間も費用もありません。そのため、一切家の外では遊ばせていませんし、洗たく物の外干しもししていないので、不便です。」

逆に、外干しするようになったという意見もある。

- ・「まだまだ生活への悩みはあります。1つ変わった事と言えば、洗濯物を外に干すようになった事です。しかし私の家の外の空間線量数値は、いっこうに下がらず高いままです。」

4 家計

(1) 収入

収入に関しては、失業等により減少したという意見が見られる。

- ・「我が家は後から来た夫が、うつ病になりました。女性の移動は比較的スムーズに行っても男性の転居は本当に大変だと感じます。今、結局夫は福島に戻り、職も失い、我が家は私の収入のみとなっ

ています。原発事故は、本当に家族を壊してしまう。」

- ・「私の両親のように農業ができなくなり職を失った人たちと、仕事をなくさずすんだ人（会社勤務など）の補償が同じなのはおかしいのでは？と思います。」

(2) 支出

支出に関しては、①「避難・二重生活の費用」、②「放射能対策費用」、③「外遊びの代わり」、④「他県産の食材・水の購入費用」、⑤「租税、公共料金」、⑥「保険」のほか、⑦「住宅費用」の7つに分けられる。

ア 避難・二重生活の費用

避難した家庭は、避難先の住宅費用や家財の購入費用のほか、母子避難の場合は二重生活のため生活費全般が増加しているといった意見があった。

これについては、前記2(1)ア「避難継続中」、同イ「避難したが戻って来た」に挙げた意見のほか、次のような意見があった。

- ・「自主避難では、経済的苦労が大きいです。福島へ帰省する際の移動費も大きいです。地震発生から時間が経ち、支援の打ち切りが迫っているので、私たちは、今以上の不安を抱えていくのが怖くなります。」

イ 放射能対策費用

放射能対策費用としては、除染費用がある。

- ・「事故後に庭の放射線量も心配で土の部分全部コンクリートで埋めました。敷地が広いので100万以上かかり、事故後、使わなくても良いような出費が増え家計に響くようになったと思います。」

ウ 外遊びの代わり

外遊びを制限する代わりに、保養や習い事をしたり、有料の室内遊び場を利用したりすることがある。

これについては、前記2(2)ア「保養プログラムの拡充を望む」、後記5(1)ウ「室内遊び場」に挙げた意見のほか、次のような意見があった。

- ・「集中力低下を防ぐためや心のストレスをかけないように習い事をさせたりと支出が増えたりして、生活スタイルが前よりも狂っている。」
- ・「毎年幼稚園の休みの長い期間は山形に保養に行くが、移動費、滞在費がかなり負担になっている。」

エ 他県産の食材・水の購入費用

他県産の食材や水の購入のため、食材費が高騰している(前記3(1)「食」参照)。

オ 租税、公共料金

事故後の租税や公共料金の負担に対する不満がある。

- ・「電気料金の大幅な値上げにより、家計の負担は大きくなっています。」
- ・「土地の価値も下がっているから、税金を取るの、おかしいと思います。」
- ・「4月から消費税も上がるし、ますます家計を圧迫していきます。」
- ・「福島県の住民税は無料にしてほしい。」

カ 保険

ガン保険に加入したという意見があった。

- ・「子どもの今後を考え(病気になるのではという)保険(がん保険)にも入った。」

キ 住宅費用

福島に住むために多大な費用がかかったという意見がある。

- ・「福島に震災後、帰ってきてから市がほとんど避難者の方のためにアパート等買い上げてしまい、借りることができず仕方がなく中古の家を買うことになってしまい、家計が苦しい状況です。」
- ・「当時は、福島市に住んでいましたが、地震の時に家のかべが割れ、家の中から外が見える状態でした。ただそれだけなら直しただけで今も住んでいられる位でしたが、原発事故で家の中にまで放射能が……。リフォームしたばかりだったのに、子供が小さい為不安もあり、家を建てました。リフォームと住宅ローンの2重苦です。」

(3) 家計の特徴

2013年と比較して変化はみられなかった。ただ、支出に関して、新たに「住宅費用がかかった」という意見がみられた。

5 子育て

(1) 遊び

子どもの遊びに関しては、①「外遊びをさせている」、②「外遊びを制限している」、③「室内遊び場」の3つに分かれる。

ア 外遊びをさせている

子どもの外遊びについては全体的に消極的な中で、子どもに外遊びをさせているという意見があった。しかし、同時に、外遊びさせることによる健康不安を指摘する意見もあった。

- ・「この春から入園しました。それまでは、他県や、会津地域など、線量の低い所で遊ばせていました。入園後は、園庭の線量は、0.13~0.15 (モニタリングポスト) で外で、制限なく遊ぶことに少し不安はありましたが、子供が生き生きとしているんです。外で、自由

に遊ぶということは、子供にとって、とても大切なことであると感じました。今でも、屋内の遊び場にもよく連れて行きますが、それでも体を動かすことが少ないです。子供にとって、大切な遊ぶ場所を汚してしまった東京電力には怒りを感じます。」

- ・「原発事故で子供が外で遊ぶ時間が減って室内で遊ぶことが多くなり、県内にも増えてきましたが、料金がかかったりすると、行く回数が少なくなります。気にしすぎは良くない！と子供と公園で遊んだりしていますが、放射線の影響はすぐには出ないから、子供たちの10~20年後には少し不安があります。」
- ・「今は、近くの公園でもおもいきり遊ばせています。休日になると沢山の子ども達や家族連れでにぎわっています。そんな風景を見ると、とても嬉しい気持ちになります。」
- ・「外あそびができるようになったとは言え、『砂や石にさわらない』『葉っぱを拾わない』木の実や虫・・・色々なことが制限されている(せざるおえない状況)ことを考えると、今の対応では十分でない。室内に遊び場がたくさんできているが、やはり戸外で遊ぶことと同じ経験はできない。体力、人間関係、社会性などあらゆる面で心配がある。」
- ・「3年もたってまだ、除染されていない公園で子供達はあそんでいます。悲しい現実です。」
- ・「幸い避難地域にはなっていませんし、私自身、政府の話信じることができないので、外遊びなどは制限していません。子供たちはストレスをさほど感じることもなく生活してくれていますが、時々『将来、病気になったらどうしよう。政府の言っていることは本当なのだろうか』と心配になります。」
- ・「まだまだ外遊びをさせるのは不安がいっぱいですが幼稚園に行くとしても園庭等で遊ばせないと子供達も言う事を聞いて帰ってくれません。他のお母さん方への手前、強くも言えずにいます。」

イ 外遊びを制限している

子どもの外遊びについては大半が消極的である。その理由は、放射能による健康不安である。同時に、外遊びしないことによるストレスを感じたり、その悪影響が懸念されたりしている。

- ・「仕事をしているため平日は子供を遊びに連れていくことはできないので、保育園にいる間に外遊びをしてもらいたいが、保育園では保護者のクレームなどもあるようで、なかなか外遊びをさせてもらえない。子供が運動不足になっているような気がする。運動が苦手なのは、震災後外遊びをさせなかったせいなのかと思ってしまうと、母親として、子供に申し訳ない気持ちになってしまう。」
- ・「あの時からもうすぐ3年がたとうとしています…今思い出しても子供達にとても不自由な思いをさせてしまった事、神経質になり過敏になっていた事、少しづつではありますが、よくなってきています。が本当にひどい思いをしいられた子供達がかわいそうになってしまいます。外遊びが1番大切な時自由をうばわれた苦しみは体験した人にしかわかりません。本当に東電には一生の償いをして頂きたい。その思いは変わりません。」
- ・「4才なのに、未だ自転車の練習をした事もなく、上2人の姉弟だったら4才の頃は補助輪のない自転車が乗れた年令です。放射能の影響でのびのび遊ばせる事もできず、不憫です。」
- ・「公園にはほとんど行きません。どんぐり、葉っぱなど、園児にとって興味深いものがたくさんあるから。それらのものを、『さわらないで・・・捨ててきなさい』とめくじらを立てておこる自分が本当に嫌いです。できればみたくないし、そんな母親見せたくない。その分、実家に帰った時は、自然の中で遊ぶことをおしめません。本当に楽しそうな我が子を見ていると、福島に住み続けることを悩みます。」
- ・「とにかく、普通にさんぽや、外遊びをさせてあげたい。思いっき

り走らせて、虫をさがしたり、落ち葉や、雪、などにさわらせてあげたい。普通の子供の生活をさせてあげたいです。」

- ・「子供達が外で遊ぶ機会が、本当に減っています。体力が落ち、さらに肥満の子が増えるのは、よくわかります。」
- ・「福島県の放射線は、特に中通りに高い数値が出ていて、いまだに、普通に生活している場所が高いまです。息子の幼稚園でも、1週間で合計外で遊ばせてもらえるのは、ずっと30分まででした（最近やっと1時間になりました）毎日外で遊ぶことが子供にとっての幸せであり、体力や運動能力を高めるためには必要なことなのに、毎日毎日室内で遊んでいては、風邪もひきやすい体になっています。……震災前は、冬の寒い日も公園に行き、遊ばせていたのにあまり行けなくなり、すごく体が弱ってしまいました。とにかく、息子がよく風邪をひき、困っています。咳をすると、なぜかぜんそくの症状が出るようになってきました。震災前までは全くぜんそくはなかったのですが、どうしてなのかは分かりませんが、体が弱くなっているのでしょうか。」
- ・「子ども達は普通に外で遊びたがります。でも直接砂や土を触ったりするので注意しますが、震災後からずっと言っているのも、子ども達も言われる事に慣れてしまって？言う事を聞いてくれない時があります。」
- ・「小さい子ども達が、幼少期に普通に体験するような外遊び（自然体験）が相変わらず制限されていることが残念に思う。草花遊び、落ち葉、木の実遊び等を自由にさせてあげたい。小学校における生活科でも、近所の野山に探さくに行けなかったり、自然の素材を使った活動ができないことが多い。（一部、放射能を心配する親さんのためで学校ができないことがある）そのような体験をさせようと思うと、他県、他地区からわざわざ素材を取りよせたり、取りに行ったりするという手間がかかってしまう。いろいろと工夫していくこ

とが必要。』

- ・「今更だけど、どこか引っ越せるなら引っ越したいし、外遊びもできるだけさせたくありません。そんな私の意見を行政の人や周りの人は、『大丈夫だから』『気にするな』と言います。でも本当に大丈夫なのでしょう？誰にもわからないことなのになぜ大丈夫と言えるの？気にしないわけにいかないじゃない！と心で思っています。」
- ・「5才の息子の体力は、兄や姉と比べて、かなり低いと思います。ちょっとした散歩や、家の周囲での外遊びが、幼子の体の成長にどれほど影響を与えるのか、今痛感しています。長期休暇に出掛けたら、幼稚園での外遊びはよくしますが、それ以外が全くない状況だと、とても病気にかかりやすい体になってきている気がします。鼻血もよく出しますし、下りやおうとも上の子に比べて多く、基礎体力の低下を感じます。家の中での遊びに慣れてしまい、ゲームに熱中することが多々あります。地域の除染は進まず、積極的に外で遊ばせる気にはなりません。除染の終わった公園でもあまり遊んでいる子を見かけることは、ありません。」
- ・「公園で遊ばせている親も少ないため、外で遊ばせてことが悪い事のような気がします。そのため、塾に習わせたり、室内のスポーツを習わせたりしているため、毎月負担になる金額が多いです。」
- ・「外あそびができるようになったとは言え、『砂や石にさわらない』『葉っぱを拾わない』木の実や虫・・・色々なことが制限されている（せざるおえない状況）ことを考えると、今の対応では十分でない。室内に遊び場がたくさんできているが、やはり戸外で遊ぶことと同じ経験はできない。体力、人間関係、社会性などあらゆる面で心配がある。」
- ・「福島県内には各市町村にそれぞれ『ある』という位、室内の遊び場ができています。遊んでいる子供たちは楽しんでいるので良いで

すが・・・やはり異様な光景なのではないでしょうか・・・あたりまえになってしまうと分からなくなってしまう。外で遊び、色々なものに触れる楽しさはどこに行ってしまったのでしょうか。」

- ・「外で遊ばせてあげたいと思っても、家のところはまだ除染が進まず、手つかずのまま。土にさわるのもダメという毎日。県外に遊びに連れて行ってあげた時は、土の上やコンクリートに座ってもいいの？とうれしそうにしていたのがとても心に残りました。またつれて行ってあげたいと思っても、家族6人分の金額をかかえるとなかなかお金が確保できず、家の中でゲームがあたりまえになってしまいました。」

ウ 室内遊び場

室内遊び場に対する要望や不満があった。例えば、設置数や場所、遊びの内容、利用料、衛生面の心配等である。

- ・「室内遊び場が少ないです。現住所の飯野町からだとして1番近い室内遊び場が市内にしかないのも車で20-30分かけて行くようになります。ガソリン代もかかるのもっと近くに（できれば徒歩で行けるような距離に）できるとありがたいです。」
- ・「これから何ヶ所か、室内遊び場が増えるようですが、もっと早く…作ってほしいなと思います。色々、調査をして…と大変なのは理解できるのですが、震災からもうすぐ3年がたつのに…。」
- ・「子どもたちが、安全にあそべる場所を増やしてほしい。屋内の遊び場を町中に1つつくっても、ごちゃごちゃしていて、かえって危険。」
- ・「ニコニコ子ども館のような室内施設をいくつか作る予定でとても期待はしていますが、幼児だけではなく、小中学生などの大きい子ども達、大人も一緒に楽しめるような施設をつくってほしいです。」
- ・「キッズニアのような小さい子供のうちから色々な仕事の体験がで

きて、楽しめる施設をつくってほしい。子供の夢が現実化し、目標も具体化し、勉強も意欲的に取り組めると思う。」

- ・「室内で遊べる施設等が多くなってきましたが、設備が良い遊具があるところは、有料だったりするのですが、大人料金がとても高いところもあり、しかも小さい子供が利用すると大人同伴なのでどうしても仕方なく払うわけですが・・・何度も行きたいと子供に言われると資金面にも苦しく希望にそえないことがあります。そういった施設等の料金の軽減をなんとかご支援していただきたいなと思います。」
- ・「郡山にも室内で伸び伸びと体を動かして遊べる施設等を増やして欲しい。(又親がゆったり休める場所があって子ども達が遊べる空間があると素敵だな～と思います。)」H
- ・「冬の時期、インフルエンザ、ノロ等も心配だし、屋内施設で遊ぶのにもちゅうちょしてました。」

エ 特徴

2013年では、回答数が「イ 外遊びを制限している」、「ウ 室内遊び場」、「ア 外遊びをさせている」の順で多かったのに対し、2014年では「イ」と「ウ」が逆転している。ただ、「イ」と「ウ」は相互に関連しているため実質的な変化はないものと考えられる。

変化としては、「ウ 室内遊び場」について、対象年齢についての不満が増加したことを指摘することができる(3件→12件)。その内容としては、「幼児だけでなく、小・中学生まで対象にしてほしい」という意見が多い。室内遊び場の対象は幼児であるのが通常であるが、放射能の対処行動として小・中学生も外遊びを制限されるようになったことからミスマッチが起きているものと考えられる。

(2) 放射能対応

子どもの放射能対応に関する意見は、①子どもの検査、②積算計（ガラスバッジ）、③その他の3つに分けられる。

ア 子どもの検査

子どもの検査については、検査に対する要望・不満・不信についての意見が多い。

- ・「5年先10年先の子供の健康が、とにかく心配で、たまりません。甲状腺の検査をもっとして頂きたいです。心配や悩み、不安は毎日つきません。子供の為にも親の為にも検査をたくさんしてほしいです。」
- ・「甲状腺のエコー検査もエコーの画面は検査中かくすようにして、親には絶対に見せてくれませんでした。何で自分の子供のエコーの画像を見せてもらえないのか医師に聞いたら（福医大の研修おわりたてのような若いDr(医師：著者)）『見せられないいきまりになっているんです』と言われました。サンプル集め？としか思えません。検査から1年以上経ちますが【A判定（のう胞なし）】の通知のみでエコーの画像は見えていません。」
- ・「心身の健康診断を継続してほしいと思っています。（自治体・国など）」
- ・「これまでも、市町村や県での検査を受けてきました。信用して良いのかどうか…結果を見てもイマイチです。『異常なし』この回答が一番ですが、そのように書いてあっても何ぞか疑ってしまいます。……娘たち3人は、半年に1度、甲状腺の検査を受けています。色々先生にも相談しています。アドバイスも頂いています。『県の検査の仕方ではダメ』という先生方のあつまった診療所なんです。大切な子どもの未来がかかっているので真剣に悩んでいます…色々」
- ・「子供が甲状腺検査でうほうがあると結果がきました。現在は心

配がないため、2年後に再検査とはありましたが、それ以降異常がないと診断されるまでの保証や将来的にガンなどになった場合の保証などはしっかりあるのかという明確なものがほしいと思う。」

- ・「福島県内で子どもたちに行っている検査は、甲状腺、WBCのみです。……茨城の常総生協では少しの負担で血液検査もしてくれる、とのこと、子どもたちの安全、安心な暮らしをどうとらえるか、その親によってずい分違うと思いますが県内での検査も多少の負担があったとしても、選択できたらいいのと思います。」
- ・「子供にとって病院は苦手な所ですが、原発事故後、いろいろな検査があり、その都度、泣かせてまで検査を受けていました。一昨年からは、子供が嫌がるので検査を受けるのをやめました。スタッフの方も、泣いている子を見ると『今日はダメ!!』とイヤな様子。私もとっても気分が悪く『二度と来ません』と怒って帰ってきました。でもやはり、子供の体は心配です。子供も、検査を受けやすい様に、子供を専門に検査をしてくれる所があるとうれしいのですが…。」
- ・「福島県立医大が担う検査等は詳細なしの結果のみ。あちこちで操作されている情報を耳にする。検査しても何の安心も得られていない。可視化と他県の参入や評価を行い適正な結果返しをしてほしい。」
- ・「ホールボディカウンターや甲状腺の検査はしているものの、あいまいな結果が届くだけで、詳しい事は教えてもらえない。どうしてきちんとした事(数値など)を教えてくれないのでしょうか…。」
- ・「子供のために福島県平田市の病院で検査をしました。お金は無料でしたが、そのような検査を福島市でおこなう検査よりも時間もはっきり長く、よくみてもらいました。そこで子供(今、5歳)の尿からヨウ素が少なくなったり、のどの所に水ぼうがが出来ていたり・・・症状が出てくると、放射能のえいきょうが出てきているの

では？と不安になりました。一応、そちらの医師は放射能が原因ではないと言われましたが、福島市でおこなった検査では何もみつからなかったのですごく不安になります。」

- ・「他県との検査結果の比較をしてほしい。」
- ・「高度医療が無償で受けられるような安心が欲しい。定期的な健診も必要」
- ・「こどもたちの内臓ひばくすることで毎年一回しらべてほしいです。」

イ 積算計（ガラスバッジ）

積算計については、その不満や別の機器の貸し出しを希望する意見があった。

- ・「ガラスバッジを身につけ年間の被ばく量を測定していますが本当に気休めだけで、意味があるの分かりません。」
- ・「福島の子どもたちだけではなく関東や東北（宮城など）の子どもたちもガラスバッジを配布して線量を計るべきだと思う。そうでないと、いくら安全と言われても不安は取り除けない。」
- ・「現在もガラスバッジで測定している。保育園へ持参している。しかし、それ以外に外出する時は、殆ど持ち歩いていない。以前は首から下げている子供達をよくみかけていたが、今は殆どみかけない。かえて、下げていると目立つ。被災、不便・・・マイナスイメージが強いように思う。定期的に交換し、測定結果の通知が来る。被害ないような数値のように記されているが、それで心の不安を拭いさることが出来るかという、そう思えない。説明書きのようなパンフレットも同封されてくるが、理解しづらい。ガラスバッジによる測定自体、本当に有効なのか疑念。」

ウ 特徴

「ア 子どもの検査」に関する意見は、52件（2013年）から18件（2014

年)に減少している(割合としても減少している。)。しかし、子どもの健康は親の最大の関心事であり、関心が薄れたとは考え難い。2013年調査はちょうど子どもの検査が行われた直後に行われたため、回答者の実感が強く、検査に関する意見が多く指摘されたということであろう。

「イ 積算計(ガラスバッジ)」に関する意見は、3件(2013年)から5件(2014年)に増加している(割合としても増加している。)。内容としては積算計の有効性を疑問視する意見が増えている。

(3) 出産

出産に関する意見は、①妊娠、②流産の2つに分けられる。

ア 妊娠

福島で妊娠または妊娠中を過ごすことについて不安を感じている。

- ・「現在妊娠3ヶ月、つわり中という事もあり、体調が不安定なのが、震災の為なのか、つわりなのか、わかりません。妊娠中を福島で過ごす事に不安はありますが、主人、両親の元に居る方が安心感が強いです。」
- ・「子供は3人ほしく、昨年妊娠しましたが、残念ながら流産となってしまいました。まだあきらめておらず、3人目が欲しいと思っています。その子は産まれてからずっと郡山育ちになって大丈夫だろうか・・・という不安がありますが、子どもは欲しい気持ちも変わりません。どうして、私たちだけ産むことに不安をおぼえ、ためらわなければいけないのでしょうか？」
- ・「4人目を妊娠中ですが、将来について子供達の事と、自分達の事(老後)など不安がいっぱいです。苦しい家計の中で、子供達を立派に育て上げられるのかなど、子たくさんだと大変です。」
- ・「2月に3人目を妊娠したようです。まだ病院には行っていませんが、やはり不安なことはあります。原発事故後の妊娠なので、どう

影響があるのか、心配です。」

また、放射能が不妊に影響している疑念をもつ人も存在する。

- ・「妊娠を望んでいますがなかなか授からずもう1年近くできません。少なからず放射能の影響を感じてしまいます!!!」

イ 流産

放射能が流産に影響した可能性を一生抱えていかなければならない苦しみをもつ人が存在する。

- ・「私は震災・原発事故当時、妊娠初期でした。9月に出産予定でしたが、8月に死産しました。死産の原因は不明。震災や原発事故との因果関係は証明できるものではないし、きっと関係ないのだろう・・・と思う一方で震災や原発事故さえなかったら、無事産んであげられたのかもしれないと思う気持ちもあります。」
- ・「原発事故後、家族設計がくるってしまった。長女はもう5歳になるが、原発のことで、いろいろと悩んで兄弟をつくってあげられなかったことが悔やまれる。3年がすぎ、そろそろ・・・と思ってチャレンジするものの、2回も流産という結果になり、『原発事故のせいでは・・・』と考えてしまうことも多い。」

ウ 特徴

「ア 妊娠」に関する意見は10件(2013年)から6件(2014年)に減少したが、割合としてはほぼ同じである。「イ 流産」に関する意見は1件(2013年)から2件(2014年)に増加している。内容については、新たに「放射能が不妊に影響している疑惑をもつ」という意見がみられるようになった。

放射能が影響した可能性は不明であることを自覚しつつも、その疑念を払拭することができないために苦しんでいるこの種の悩みは、軽々しく口

に出すこともできないであろうし、各種アンケートで問われることもないであろうから、見落とされやすいのではないか。今後もこの種の意見に注視していく必要がある。

(4) その他子育てに関する不安

子育てに関する不安は多種多様である。

- ・「私の心の不安が子ども達の心に悪い影響を与えてしまうのではないかと、また不安になってしまいます」
- ・「放射線の不安を持ちながらも、でも自分の育ったこの地で育ててあげたい。この3年（震災後）でこの思いが強くなったように思います。」
- ・「大震災、原発事故からじかかんが経過したからこそその悩みや問題も多くあり、その難しさを感じています。様々な面で『何とかなるさ〜。』とは前向きになれない時代になって来た子どもたちの未来を案じています。だからこそ大人がきちんと先のことを考え、多くの人たちのことを考え、子どもたちが自分の力で頑張ろうと思える大人に成長できるよう育てて行くことが大切だと思っています。何が起きるか分からないけれど、投げやりではなく日々を大切に生活していきたいです。」
- ・「子どもはかんしゃくもちで暴れてしまうこともあり、子育てに悩み、泣いて過ごすことも多々あります。日々、育児、仕事、家事で忙しく疲れはててしまい、イライラしているので子どもが甘えたいときに甘えさせることも出来ず、子どもがかawaiiそうだなと思っています。日々いろいろなことに悩んでいます。」
- ・「子育てについて悩みます。ここで育てていって本当に大丈夫なのか…？学力がついていけるのか…。震災後、イラだちの中、子育てをしました…。(避難先で)虐待だ！！と回りから言われました…。そのせいかな？子供は発達に遅れがあります。自分を責めてしまいま

す。それでも『できの悪い』子供を又、叱る日々です。』

- ・「元通りになるわけがないのはわかっていますが、それでもここでこの場所で子育てをしていかなければならない現実があります。どうしたら子供を守っていけるか、資源をどれだけ残せるか…不安はつります。」
- ・「原発事故から、3年という月日が流れますが、不安が消える日は1日たりともありません。そして子供が成長していくこれからも不安は大きくなるばかりだと思います。」

6 人間関係

(1) 夫婦・親族

夫婦や親族との間に考え方の相違があるため、意見の対立や関係の悪化に発展する場合がある。

- ・「避難する側にもしない側にもそれぞれの考え方があり、尊重すべきであると思うし、私は避難しないことを親せき中に非難され、今だに子供達がかわいそうと言ってくる。現在私が、妊娠していることも言っていない。主人とも意見の相違があり、妊娠のことについては何も話してはいない。妊娠していることだけは知っているが、言い争いを避けたい（主人は処置を求めている）ので、子供達にもまだ話していない。現在6ヶ月。もう処置できない時期にあるので、そろそろ性別の事を交えて話そうかとも思っている。皆んな自分の考えがあり、それはそれでいいと思う。でもその考えを強要したり、人の意見を非難したりするのはやめて欲しい。私はいろんな問題があったとき、この話を公明正大にしたらどんな返事が返ってくるか、神様だったら何を望むか考えることにしている。そうすることで強くなれるような気がしています。」
- ・「漠然とした不安を抱えながら金銭的な補償も子供の将来の健康の保証もないままここに住み続けることが大丈夫なのか、決断できな

いま時間だけが過ぎていきます。私の場合は、西日本に帰れる実家があるのでなおさらです。公務員の夫は転職を伴う転居にも、家族が別々に暮らすことにも乗り気でなく、私だけが空回りしあせています。震災以降、夫婦間での考え方のズレがどんどん大きくなっており、平和だった震災以前の生活がたいへん懐かしく思い出されます。こんな母親の状態を子供に知られまいと明るくふるまわなければならないことに一番疲れています。』

- ・「放射能汚染に関して理解があると思っていた主人の両親が徐々に変わって来ました。検査をしていない自家製野菜、海釣りの魚を(最近になっては)子供に食べさせようとしています。数年後に同居する予定なのですが、汚染対策の理解を得られないのであれば同居しない方向に話を進めたいのですが・・・現状に慣れてしまった人達が子供の安全を考えない様になって来たことに危機感を覚えます」
- ・「やはり放射能に関しての両親、夫との考え方のずれは埋まりません。2人目出産の時 一時的に県外へ行ったりもしましたがあまり良く思われず、『気にしすぎ』との事でした。その事が産後うつのような症状をより強くさせて自分自身の体重の急激な減少、抜け毛など体調に表れたりもしました。その時のことはずっと忘れられません。子供の事を考えての行動を非難されてものすごく傷つきました。」
- ・「昨年末 離婚をして、現在シングルで子ども1人を育てています。結婚15年様々なことがあり少しずつお互いの存在や考え方にズレが生じてきていたのだと思いますが、大きな『きれつ』を生んだのは震災後の原発事故で幼い子どもをどう守るかという点だったように思います。子どもを思う親心にちがいはないものの 母親のそれと父親のそれ(立場)はちがうものでした。とにかく我が子を守りたい一心の母親に対し、仕事や世間体、金銭的なものなど、現実を厳しくつきつけられ、まるで私たち母子がわがまま勝手にふる

まっている様にみられていたのを知り情けない気持ちになりました。どこで大きくズレってしまったかはわかりません。でも心と体を支え合い依頼し合う夫婦、親子(父子)関係ではなくなっていたと感ずます。原発のせいだけではないかもしれませんが、考え方や人生における優先順位のつけ方のちがいをつきつけられた結果だったと思います。」

(2) 近所・知人

近所の友人や知人との間にも考え方の相違があるため、意見の対立や関係の悪化に発展する場合がある。

- ・「学校、幼稚園の中で、親同志、子供たちの中で“放射能”という言葉はタブー化されています。元に戻るにはまだまだなのに・・・まだまだ不安な生活を送っているのに・・・家族間でしか話せないのが現状です。震災以降、友達関係も探りながら接する感じで住みづらくなっている気がします。」
- ・「友人どうしても震災の話はしなくなりました。お互い不安を、むし返すだけだから。平気なフリして気丈にしているお母さん達、家族の健康を支える立場だからこそ、(家計も預かっているから)本当は不安だし大丈夫と言ってほしいです。忘れられたくないです。平気なフリしてないとやってけないです。」
- ・「東電の事故のせいで多くの友人を失くした。」

(3) 外部

「福島」出身者に対する差別や偏見を不安視する意見が多くあった。内容としては、結婚や就職等の際に不利益を受ける可能性を指摘するものが多い。

- ・「子どもたちは何も悪くないのに、この原発事故が原因で将来、いじめにあったり、差別をうけることは許されません。原子力発電所

というものの役割と『ふくしま』という地域のみにょくを発信し、放射能に汚染された地域に住み続け、ふくしまを守るためずっとふくしまで生活してきたということを全国のこどもたちにも理解してほしいと思います大学生、社会人になった時、ふくしまの子どもたちがどうだと全国に出て活やくできることを願います。」

- ・「将来、子供が結婚する時、県外の方が相手だと、恐らく子供を作る、または結婚そのものにちゅうちよするような事が起こるかもしれない。(相手の親御さんが特に)」
- ・「私のいとこが大学で県外へ行き、アルバイトの面接へ行き、合格していました。しかし、周りの人から福島県の人とは接したくないと言われ、雇用解除になりました。結局 きちんとした情報が行き届いていないのが現状なんです。これからの子供達が成長し、結婚や就職や出産などで、このような状況になりうることもあると思います。直接的な原因が違っていたとしても、福島県外の人たちには伝わらないかもしれない。そういった不安もあります。」
- ・「これから進学、就職、結婚といった時に、福島出身ということが影響しないかが心配です。上の子供達は大きいので、そういう差別を受ける可能性があるということは話してあります。」
- ・「娘は福島から将来県外へは進学、嫁には行かせません。いつか、嫌な思いをするかと思ったら、せつないです。もし、子供を産んで障害があつたりしたら、絶対そのせいだと言われるでしょう。相手の両親とかに。だから福島で結婚して、一生福島で生きていくしかないんです。世界で有名な FUKUSHIMA なんですから・・・。」
- ・「偏見によるイジメが他県に行くこと怖い。特に関東～。放射線がばらまいたのは健康被害だけではなく、住まいを追われた方と地元の見えないいざこざや、他県の偏見や軽べつもあり、増税にしても、除染費用のせいみたいと言われ・・・。本当に『環境』がむしばんでいる所があると思う。今、生活で苦にならなくなってきたけれど、

時々、思い出させられて胸が痛む。」

- ・「県外の方との放射能への価値観の違いに、驚くことがある。県内、市内では安全と言われているが、県外ではそう認識されていない。育児も福島ではしたくないとハッキリ言われると、この土地で出産し、育児をしている自分は我が子に対して何もしてないのではないかと、将来の事を考えてあげてないのではないかと思う。本当にこのまま、ここに住んでいいのか不安だが、何も行動を起こせない自分が無力で子供達に申し訳ないと思う。」

(4) 避難・賠償の取り扱いに差異のある人

行政や東電が行った賠償・補償の線引きに対し、他人が優遇されていると感じ、その恩恵を受けている人に対して怒り等を感じるという意見があった。

- ・「双葉、大熊、富岡、楢原、この4町が、原発を賛成して持ってきたのだから、苦しんで当然と私は思います。なのに、毎月多額のお金が入り、仕事もせず、パチンコ、外食、遊び放題…マナーは悪いし、同じ福島県民でなんなの？ 私たちはあんなたちのおかげで、保障も無いし、子供達は自由を奪われ…国・県・市・政治家、分かっているのか！！と言いたいです。」
- ・「私達は福島県、郡山市に住んでいます。同じ県内でも、線量はとても高いです。それなのに私達は避難してきているのではないので何も保証はありません。郡山市の対応も本当に何もしてないと思う。・・・避難してきている方々はお金もたくさんもらっていて、色々なところでわがままな態度で気分も悪くなります。避難民なんていなくなればいい。本当迷惑なんです。私達にも保証がほしいです。」
- ・「原発の避難の方々の横柄な態度に不満を感じる。自分の街が、浪江の方々のおかげで、きゅうくつ。避難の人優先の不動産や病院に

も不満。保障してほしいのは私たちもだと思う。県民すべてが原発の保障（賠償金で）暮していると思われたくない。避難者の不満を聞きたくない（公共の場でグチる人が多くて嫌だ）」

- ・「近所に引っ越して来た方は、賠償金もらって海外行ったり、パチンコ行ったり、車買ったりと、不公平さを感じる。中には本当に戻りたくて大変な人もいるだろうけど、金銭面に余裕も出来、元々その町から出るつもりだったから、助かったとか言ってる言葉を友人から聞いた時とても腹が立った。」

(5) 特徴

「(3) 外部」に関する意見は79件（2013年）から29件（2014年）に意見が減少した。原因は不明であるが、単に重ねて記述しなかっただけの可能性がある。いずれにしても、「(3) 外部」に関する意見は、人間関係に関する意見の中では最も多い。差別や偏見の不安は子どもの将来に関する不安であるから、容易に無くなるものではないだろう。

7 情報

(1) 情報の収集

情報の収集に関する意見は、①情報不信、②関心の低下の2つに分けられる。

ア 情報不信

情報不信については、流通している情報に矛盾がある、行政や東電を信用できないといった意見が多数あった。

- ・「原発のこと、放射線被害（健康被害）について真実を知りたい。かくし事はせず、これから自分達はどのように生きていけばよいか判断する材料にしたい。福島で生きていくことは親である私たちが決めたことなので、正確な情報が欲しい。」

- ・「ニュースを見れば今だに水漏れが見つかったが、外の海へは流出していないとか聞いても何とも思いません。どうせ知って状況はどうにもなっていないのと国+県+東電のいんべいこうさくがありありと情報伝達内容は震災時も今も変わっていない気がしてなりません。先の見通しを知ることは難しいです。」
- ・「医師、専門家、話を聞くたびに、ちがう事も多い。どの情報を信じれば良いのか正直分からない。兄弟も、学校の先生から、いろいろ話を聞いてくる正直、バラバラの話です。」
- ・「情報が色々ありすぎて、何を信用すれば良いのか分からない。不安にならない為にあまり情報を耳に入れたくないとまで思う。」

イ 関心の低下

関心の低下を感じるという意見があった。時の経過により慣れていくことへの不安が多数指摘されている。

- ・「自分自身、放射能がある生活に慣れてしまったことに不安を感じる。何か重要なこと(情報)が後々出てくるのではないかと思うと、不安である。」
- ・「通学路などは危険なレベルのホットスポットもあります。そこを小学生が笑いながら歩いてく・・・そんな光景にも悲しいことに慣れてしまうんです・・・そんな自分もつらくてつらくて普段は大丈夫なんだけど時々すごい不安がおしよせてきて何年後、この子たちは大丈夫なの・・・?と眠れない日もあります。風化してきている」
- ・「福島県内でも、地区や状況によって、関心や反応が様々になり、自分でも、放射能に鈍感になっている事に、がく然とします。3年もたとうとしている中で、進まない放射能への対応に、皆、それぞれの度合いですが、疲れています。長期化している分、精いっぱい毎日ですが、心の安全のために、考えないようにしてしまう自分

や周りが恐ろしいです。』

- ・「毎日のようにTVでは汚染水のことをやっているが、もう今では、それを見ても何とも思わないし、感心がなくなってしまっている。以前は『またか・・・』と思ってたけど、今はそれもなくなった。もう考えることにも疲れてしまった。』
- ・「危機感を持たずに生活が続いている状態なので、慣れてしまっている事が、監視の目が無くなってしまい、この先、子供たちを守っていけるのか、不安があります」

ウ 特徴

情報不信に関する意見は62件(2013年)から10件(2014年)に減少した。その理由は、あきらめの気持ちとともに、当事者においても風化がすすんでいる側面があると考えられる。

「関心の低下」に関する意見も数としては減少しているが(20件→14件)、割合としては若干増加している。それよりも重要なことは、その内容である。「放射能のある生活に慣れてしまった」、「問題意識が鈍化した」という意見のほか、「心の安定のために考えないようにしている」、「考えることに疲れた」という意見がみられた。家庭ではどうしようもない事態に直面し、子どものためにと何とかしようと考えてみるもどうにもならず、問題が解決されないまま時間が経過することによって必然的に生じる心境の変化である。

したがって、情報不信に関する意見の減少は、ただちに情報不信の減少を意味するわけではない。むしろ、上記のようないわば「あきらめ」の状況が生じているのであって、問題は深刻である。

(2) 情報の発信

福島現状を広く知ってほしいという意見が少なからずあった。

- ・「福島より県外へ出られている方は今も沢山います。そして、援助

もつづいています。しかし、福島に残る私達は、リフレッシュ事業などという一部の人のみが受けられる援助のみです。『避難＝被害がある、残る＝被害なし』との判断がされていると聞きました。本当に不公平です。県外避難で受けている分の援助を残る人達にも行って欲しいと思います。また、母子避難をしている家庭で両親との同居が嫌だから…夫婦仲が悪い…という家庭の事でそれらの援助を利用している方も多くいます。おかしいですよ…その所もはっきりと報道されるべきだと思います。福島＝危険といつまでも言われるのは気分が悪いです。」

- ・「全国的に福島の安全さをもっと伝えてほしい。現在の状況も。実家（県外）に帰って地元の新聞をみたとき、原発に対してのニュースやまだ×②影響をうけて暮らしている方々がたくさんいるのに忘れられたように何もとりあげられてなかったのが、悲しかった。忘れないでいてほしいと思う。」
- ・「小学生と幼稚園の子どもたちが、もう少し大きくなった時に、震災や原発のことについて考えると共に、次世代へ語り継いでいくことの大切さを知る機会を学校又は、講演会などでつくってほしい。」
- ・「『福島』の報道に関して、差がありすぎ、片寄っている。全国版では、相変わらず悪いニュースばかり速攻で報道し、避難者の怨み節ばかり流しています。だから、福島で当たり前で生活、子育てをしている人達が様々な点で不利益を被り、不当な差別を受け、結果的に福島全体の風評被害が無くならないと思います。危険な面と、安全安心な面を分けて、片寄りなく報道してほしいです。」

8 賠償・補償

(1) 賠償

ア 賠償の打ち切りに対する不満、子どもの将来の損害に対する賠償

東電の賠償の打ち切りに対する不満や、子どもの将来の健康被害に対する賠償が適切になされるかという不安がある。

- ・「今だに放射能の影響は続いているのに保障は全くななくなっている。そのうえ、電気料金の大幅な値上げにより、家計の負担は大きくなっています。不公平感はずっと続くと思います。」
- ・「子供達は今は元気でも将来、影響がでてきた時に、原発の影響と認めてくれて保障してくれるのか、今だけではなく、将来まで、いろいろ保障してくれるのだろうかと心配があります。だんだん心配や、支援や事故のこと忘れられていくのだろうか、少しあきらめ感もあります。」
- ・「除染も、家のまわりはひかく的低いということで後回しにされ、気づけば他より高い所もあるのでは？という感じだし、それなのに東電からのお金も早々とうち切られ、まるで片付いたようにされていることに腹が立つ。」

イ 賠償の対象、範囲の線引きに対する不満

実害に対し賠償されないことに対する不満や、賠償範囲の線引きに対する不満がある。

- ・「今現在も汚染水漏れなどで原発は安心できません。避難していない者もたくさんの不安やストレスを感じています。避難者だけが賠償金をもらっているのは不公平。福島に住み続けている者だった皆さんのものを犠牲にして生活しています。」
- ・「原発事故後、すぐよりも、今の方が、他県に出かけるのが、なんとなく、ひかえたいと思うようになった。賠償の差がかなり大きく、県内でも県外でも、もめごとの原因になっているように感じま

す。・・・年間、1 ミリシーベルトを超える地域には何らかの賠償なり、除染をてっいていするなりしてほしい。これからは、線量によって、分けてほしい。」

- ・「となりの家と同じ年齢の赤ちゃんがいるのに、うちが2カ月遅く生まれただけで、妊娠中と出産後の保障金の差が、数十万（あわせて）もあるというのは不公平。時期もはんばで線引きされているので、納得いかない！子供の価値の差が（同じなのに）決められたようで、思い出すと腹が立ちます。」
- ・「2年前に妊娠し、流産し、子宮内除去手術をしました。東京電力の賠償金請求は妊婦も含みますが、賠償の基準となる日の直前に手術をしたので、お金はもらっていません。あともう少し、おなかの子が生きていてくれれば、お金がもらえたのにとってしまう自分が、卑しくて腹立たしいです。」
- ・「東電の賠償金は、避難してもしていなくても同じ統一金額だったことに対して今でも不満に思っています。自主避難ですから、仕方ないかもしれませんが、避難した人は、それ以上にお金がかかったわけですから、かかった分だけでも賠償すべきだと思います。」
- ・「避難して、お金がかかったと東電をうったえればお金がもらえる。でも、うったえるにもお金がかかる。お金がなくて、どうしようもなくここにとどまる貧乏人は、国も県もどかも無視。・・・お金がある人の所にしか、お金は入らないの？」
- ・「東京電力の保障は、震災当日の3月11日に住民票が二本松市になかったため何も受けることができませんでした。2011年4月以降はずっと福島県内に住んでいるのに不公平だと思います。3月11日以降県外に移動した人は保障対象なのに、2011年4月から福島に来た人には何もなし。私達は納得できません。」

ウ 特徴

賠償の打ち切りに関する意見は46件(2013年)から22件(2014年)に減少し、賠償範囲の線引きに関する意見が18件(2013年)から58件(2014年)に増加した。2013年調査の時点では、東電による賠償が事実上、打ち切られた直後であったことから、そのことに対する不満が多く指摘されたものと考えられる。2014年調査では賠償の打ち切りに対する不満を重ねて指摘することがなくなっただけの可能性もあるが、賠償に関する情報が一般に認知されるようになった結果、賠償の打ち切りに対する不満が賠償範囲の線引きに対する不満へと変化した可能性がある。

賠償範囲の線引きに対する不満は、賠償の取り扱いに差異のある人との間の人間関係にも悪影響を及ぼすことがある。現に、この人間関係に関する意見は10件(2013年)から8件(2014件)とほとんど減少していない。

(2) 社会保障

ア 子どもの健康

子どもの健康被害に対し、予防・発見・賠償・補償が適切に実施されることが望まれている。

これについては、前記5(2)ア「子どもの検査」(19頁)に挙げた意見のほか、次のような意見があった。

- ・「チェルノブイリの事を考えると4年目位から人体への影響の結果が出て来たのを記憶しています。その時までには”因果関係は認められない”など言われる事のない様、今から補償なり対応策を固めて行って欲しいと思います。」
- ・「この先どのような事が起こるか(影響が出るか)わからないけど、どうなっても見捨てず考えていってほしいと願います。医療保険などしっかり受けられるよう(受けられなくなる事のないよう)保護してほしいです。」

イ 家計負担

家計負担の増加を受けて、それに対する社会保障としての手当等が望まれている。

- ・「気持ちは（土、日）は県外であそばせたいです。でも、経済的についていけず・・・ほぼ、お家ですごしています。子供を安全にあそばせるために、県内でなにか交通費だけでも免除があるとうれしいです。」
- ・「子ども手当を18才まで引き上げてほしい」

ウ 特徴

社会保障に関する意見は11件（2013年）から23件（2014年）に増加しており、社会保障に対する関心が高まっていることが伺える。子どもの健康や経済的な不安を社会保障の次元で取り組んでほしいという気持ちの表れであると考えられる。

(3) 租税

原発事故後の租税負担に対する不満がある（前記4(2)オ「租税、公共料金」参照）。

(4) 対応全般

ア 行政の対応に対する不満

行政の対応に対する不満がある。例えば、対応の遅さ、不十分さ、不合理さ等が指摘されている。

- ・「園バスのバス停も当時1.2 μ SV以上あり、園や管理している障がい福祉課へ『バス停は高線量の為自宅前で乗り降りしたい』旨を何度もお願いしましたが全く相手にしてもらえず1マイクロある中、1才の下の子と供にバス待ちしていました。障害児と健常児の対応に差があり、『障害児は被ばくしてもいいの?』という扱いでした。」

- ・「役場に相談窓口がほしい。支援法もなおざりのまま、各地へひなした人も含め、ある程度原発事故について知識のある方の相談窓口が平均してなく、地域サービスの格差を感じます。」
- ・「福島県は復興にばかり力を入れて、現実を見ようとしていない。実際、甲状腺がんの子供も急増している。でも『原発のと因果関係はない』とか『不明』とか。食べ物に関してばかり『風評被害』とか被害者ぶっているが、1番大事にしなきゃならない『命』には目もくれず、『健康被害』はないとしている姿勢に親として、怒りを感じずにはいられない。健康被害はまだ急増する。放射線が目に見えないからと言って、ごまかすのはいい加減にして欲しい。チェルノブイリを見ても、健康被害がこれから時間を重ねるにつれて増えるのはわかっているのに、現在『何もない』として何の対策も立てないのはおかしい、これからのために今を大切に、子供たちの未来を守って欲しい。これでは福島に生まれ、福島に育ったことを後悔してしまう。福島で生まれたこと、福島が大好きだと言えるよう、県そして市には責任を持って、対応して欲しい。今の知事ではなかったら、前知事(佐藤栄佐久)であつたら、もっと県民のため、子どものためと国と戦ってくれたと思う。現知事は自分がプルサウマルを受け入れた責任をとり辞任するべき。」
- ・「福島の子供もへの医療費助成について気になります。市町村で対応が様々ですし、いつまで続けてもらえるのかと心配になります。」
- ・「あれから3年が経過しようとして居ますが、全く進む事がないと思ってしまうほど、遅い対応・・・私達は本当にここに住んで日々生活をくり返して良いのかと不安になります。どう考えても、親が先に死んでしまうものの、残された子供達はどうか苦しんで病気が発症したりするのか不安で仕方ありません。親としてどう子供を守って行けば良いのでしょうか？子供達は夢をもつ事が出来るのでしょうか？考えすぎなんですかね・・・同じ事を聞かれるたび先を考え

過ぎて不安になり気分が沈みます。周囲が言う様に私達は実験でしかないのでしょうか？」

- ・「今、これから先、将来の生活があるので、その事を考えると、国や市が何かしてくれなくてもあきらめるしかないのかな、と考えています。自分達の事は自分達で何とかしていかなきゃいけないかな、と。」
- ・「子供に対しての子育て支援（震災後）をすすめてるとの国や県の話は聞れるものの全くと言っていい位、感じられない」

イ 東電の原発事故対応に対する不満

東電の原発事故対応に対する不満がある。例えば、対応の遅さ、不十分さ、不合理さ等が指摘されている。

- ・「放射能への意識が風化している感じを受ける。東電もそうだし、もっと何が、気をつけなければならない事で、何は安心なのか伝えてほしい。」
- ・「本当の情報をかくしている東電にはうんざりです。後手後手の計画、なんでもっと早く海外の支援をうけてまで、対策をとらなかったのかと思います。」
- ・「今でも心に傷を負っている人々に東電からは詫びの一言（CM等）がもうなくなって、終息したかのようで、腹立たしく思う。」

ウ 原発事故を踏まえた原発の是非

原発事故の被害を体験し、原発の是非について否定的な見解を述べる意見があった。

- ・「現状を元に戻せないのであれば原発はやめるべき。原発賛成と住んでもいない人達が言うのはおかしい。福島に住めばいいと思う。賛成と言ってる人達は今すぐにも外を元通り遊べるようにしてほしいと言いたい！」

- ・「安全なエネルギー使用をしてもらいたい。原発を早く停止しやめてもらいたい外で遊んだりしているが、林や森には入れない、私達も少しずつなれてしまい、放射能汚染のことを忘れてしまいそうになる。日本のみなさんも忘れていってしまう。忘れないでほしい。そして二度同じあやまちがおきないように、日本はがんばってほしい。もし、自分の住んでいる所で、原発事故がおきたら、どう思うのか？考えてほしい、子供が健康に育ってほしい。」
- ・「この状況の中で福島の人生活しているのに、他の地域では原発を稼働させようとしていることが信じられません。原発は決して低コストの発電方法ではないし、目先の利益にとらわれずに、物事を考える社会になってほしいと思います。」

エ 寄付金の使途に対する疑問

寄付金の使途に対する疑問を呈する意見があった。

- ・「たくさんのお金が寄ふ？されているはずなのに、何に使われているか全くわからないのがイライラする。」

オ 特徴

対応全般に関する意見は34件(2013年)から39件(2014年)に増加した。行政に対する不満(ア)、東電に対する不満(イ)、原発の是非(ウ)はいずれも増加している。行政や東電の対応が必要不可欠な状況にあるものの、それが不十分であるために、不満が増加しているものと考えられる。

9 健康

(1) 子ども

原発事故との因果関係は不明であるが、甲状腺のしこり(のう胞)、鼻血、運動・体力不足、肥満、皮膚異常、かぜをひきやすい、心臓痛、白血球異常がよく指摘されている。

- ・「鼻血が出やすく、皮フが乾燥し、かぜをひきやすい。月に1-2回、かぜや皮フ科で受診をしている。運動不足から肥満ぎみでもある。」
- ・「事故後に郡山市に転勤で来て1年半が過ぎ、子供達の体力低下や運動機能低下、肥満傾向増など周りの子供達も含め気になり始めました。双子の上に小学3年の長男がおり、特に小学生に肥満児が多いなあと気になっています。」
- ・「体質によるものかもしれませんが、『頭が痛い』『心臓が痛い』ということが多くあります。風邪のひきはじめや、日々の疲れで頭が痛いのか？不安、心配になります。ずっとは痛くないようで…。一度、心臓のことも小児科の先生に相談しましたが、『特に異常はない』とのこと。痛みが続くようなら、大きなHp(病院：著者)でと言われました。4才 今年3月で、5才になりますが、そんなに小さくても頭痛や心臓痛あるのか？と、心配になります。」
- ・「小学生の姉の方が、あの時の事を思い出すと不安を感じたりも少しあったり、つかれやすく、皮フのかゆみもあります。」
- ・「子供が5歳から12歳まで3人いるのですが以前 甲状腺検査をしましたが3人共、のう胞があることがわかりましたが、2年ごとの検査で大丈夫ということですが、親は不安です。」
- ・「震災後に産んだ子供(1才)が、性器に障害があり、原因不明のケイレン持ちである。ほうしゃのうの影響はなかったのか未だに心にひっかかっている。」
- ・「震災1ヶ月前に産まれた末っ子はもののみごとにアトピーになりました。」
- ・「子供(4才)も心臓が痛いと言う事がありました。上の子(7才)は震災後から頻繁に鼻血を出す様になり蛇口をひねって止まらない位、1時位ドバドバと鼻血が出た事もあります。現在は、朝、晩と薬を飲み続けています。」

- ・「昨年、年末（10月中旬頃）から子どもが発熱・咳くり返し、月に何度も高熱を出すので病院で何度も検査してもらったのですが、一時、白血球が24000と高い数値で再検査では7000台で異状ではないと言われたのですが…心配です。同じ頃から咳もずっと続いています。病院に行っては、風邪と言われ咳の薬をもらうだけです。咳と白血球と、何か放射能が関係あるのではと思ったり、もしかして甲状腺に何か異状があるのではと思って不安になります。」
- ・「最近ですが、子供ののど両方のしこりが少しずつ大きくなってきている事を感じて小児科の先生に見ていただき薬を服用しての経過を見守る事しか出来ず、リンパの腫れにしてはおかしいと思っている毎日です。首のまわり先日アレルギーみたいになってとてもかゆがっておりまして。今までアレルギーになった事も無く健康だったので心配ではあります。」
- ・「対象の子供の3つ上の兄に震災後精神的症状が現れ、悩んでいます。対象の子はとても元気で3番目ということもあり、とくに心配はありません。」
- ・「対象の子どもと小3の姉は2週間も完治にかかり・・・咳やのどの痛みに苦しみ、・・・こんなにひどいのはみんな初めて。今までインフルエンザになっても3日～4日で治っていたのに。免疫力が落ちている気がして心配しています。」

このほかに、伝聞ではあるが、「肥満」、「甲状腺ガン」、「甲状腺の腫瘍」、「白血病」等を指摘する意見があった。

(2) 親

うつ、ストレスによる体調不良、流産（死産）がよく指摘されている。

- ・「仕事のストレスもあり、乾癬の症状もひどい。円形脱毛症も出来た。頭痛もあり、鎮痛剤などの薬が手離せない。」

- ・「震災があった年の5月に線量の低い場所へ避難しました。2年ほど生活し、夫が体調をくずしました。原因は避難先→職場への通勤(往復2時間高速理用)に疲れ果て、ストレスがたまっただけでした。夫」
- ・「私自身、体に障害(下肢4級)があるので、子供2人を連れての避難はとても辛いです。主人も私も昨年頃から心臓の動悸が急になるようになり・・・ました。私は昨年、突然足に3cmの腫瘍ができ、(幸い良性でした)切除手術を受けました。」
- ・「震災後が特に(性格)変わり始め、現在も続いています。震災前は、普通に楽しく過ごしていましたが、後(震災)になってうつ病に近い感じになってしまって子供にあたる日々が続きました。私も病院へ行きたい気持ちがあったのですが、なかなか行く時がなく、家にもったままです。子供にあたらぬ様には気を付けているのですが、『原発』の事になると、どうしても気分がすぐれません。」
- ・「2月中旬には家族8人全員インフルエンザBになり・・・私も3週間は咳やのどの痛みで苦しみ、私は今でもたんがからみ、のどの調子悪いです。こんなにひどいのはみんな初めて。今までインフルエンザになっても3日~4日で治っていたのに。免疫力が落ちている気がして心配しています。とくに私の夜の疲れがひどく、食後のだるさや眠気は病的だと自分でも感じています。」

このほかに、伝聞ではあるが、「リンパの腫れ」、「再生不良性貧血」等を指摘する意見があった。そのうえ、子と親のどちらに関する意見か不明なものがあった。

- ・「医療の世界にいと、心疾患、心臓関係の方面にも放射能の影響が出て来た人たちが増加して来たのがわかります。」
- ・「昨年(2013年)は、のどの風邪が治らないことが増え、周りも治りにくいと訴える人が多かったように思う。これは少しでも影響

があるのではと思わずにられない。」

- ・「家族がかわるがわる体調をくずしてしまい、返送が遅くなってしまってますみませんでした。」

(3) 特徴

子どもの健康に関しては、2013年と同様、外遊びの制限による運動・体力不足、肥満が指摘されている。

親の健康に関しては、2013年と同様、不安やストレスに起因する健康不良が顕著である。うつ状態に至っていることを指摘する意見が増加しており、これまでに蓄積されてきた不安やストレスが具体的な症状として現実化してきている可能性がある。流産（死産）を指摘する意見も増えているが、これも不安やストレスに起因している可能性がある。

10 アンケートに関する意見

「福島子ども健康プロジェクト」が2013年と2014年に実施した「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」に関する調査対象者からの意見もここで紹介しておきたい。このアンケート調査に関する意見は①「アンケートに不快感」と②「アンケートに協力的な意見」、③「意見・要望」の3つに分けられる。

10.1 2013年

2013年のアンケートに関しては、①「アンケート不快感」が106件、②「アンケート協力的な意見」が110件であった。

アンケートに不快感

- ・「このようなアンケート等がある度に、福島に住んでいる、住んでいた事が実験材料になっていると感じます。貴重なデータとはなるとはありますが、複雑な心境になる事をきちんと理解して頂ければと

思います。私は以前のように普通に暮らしたいだけです。」

- ・「このようなアンケートや、行動について、書くことが多いのですが、こういうものを書くことがストレスです。私達のことを想ってのことはと思いますが、こういうものをストレスと思う方も多いことを知ってほしい。事故から2年も経つというのに将来への不安が残るだけで、何も変わっていないのが現状です。であるならば、むしろ事故を忘れたい。そっとしておいてほしいのです。色々してくださいるのは分かりますが、的外れです。」
- ・「今回、アンケート実施することの説明書が同封されていましたが、率直な意見として、『なぜ福岡大学から、うちの子供に書類が来たのだろうか?』と疑問を持ちました。文部科学省科学研究費の助成があり・・・とのことですが、私個人としては、こういったことをやるために居住区(二本松市)からの文章がまず欲しいです。正直原発事故があってから『福島県民が研究材料。今後のモルモット』であると感じています。実際に私達がアンケートに答えたり、その他のことに協力することが今後活かされると思うので協力は惜しみません。しかし、上記した気持ちがある中で突然福岡県から資料が送られてくることは正直うれしいものではありません。」
- ・「このアンケート1冊でどれほどの現況を知ることができるのかわかりませんが、1つ1つの質問が傷をエグられている様な気がしてなりません。不安を抱えずに福島で子育てをしている人はいないと思います。質問の問いが、原発事故の影響ありきの立場から投げかけられている様にしか感じません。それだけでなく不安なのに、こういった機会ですさらに親は子どもに何をしてあげられるのか、何をしてあげているのか、と責められている様な気さえます。我が家はもう線量は測っていません。(以前住んでいた全壊した家は測っていました。)理由は数値を追っても生活上、何の意味も持たないからです。数値を知っても、ここで生活を続けなければいけない者

にとって、不安にしかならない。(子どもをできるだけ外へ出さないことは変わらないので。) 調査をする場合、もっと対象者に誠意を持った聞き方があると思います。どこから住所や名前を手に入れ、書類が送られてきたのかもわからず、不思議に思っています。説明不足です。(郡山市は後援団体に入っていないので。)」

- ・「一度目のアンケート依頼(青ふうとう)を受け取ったときは、突然のことで、信頼できる団体のものなのか不信感いっぱいでした。こちらの市町村なども協力しているのであれば、市政だよりや新聞などで、前もってアンケート調査をする旨のお知らせをもっと大々的にやっていただけるとよかったです。(私の場合、”再度お願い”のハガキでやっと協力することに決めました) ・今後、より有意義な研究ができることをお祈りしてます。私たちの意見がただのサンプルではなく「子供に未来を希望いっぱい生きてほしい」と強く願う親たちの気持ちが込もってることを忘れないで調査・研究をすすめていただければ救われます。」

アンケートに協力的な意見

- ・「何も変わっていないのに、今の現状に慣れていくのが不安でもあり、落ち着いて(安心となる)しまうので、かっとうします。日々、どうしたらいいが分らないです。ただ、このような取組みをしていただくと福島の事を想っていただいているんだなあと感謝いたします。どうか、有効に今後も対応いただきたく、お願い申し上げます。」
- ・「原発事故後の子供についての不安なことなどを聞いてくれる所もなかったのが、このようなアンケートをとってもらい、思いをぶつけることができ、よかったです。ありがとうございました。」
- ・「震災のことを忘れずに、心の健康にも配慮したアンケート、自分自身もその時の事を忘れずに振り返るきっかけとなり、ありがとう

- ございました。こんな風に立ち止まって考える機会があるというのは、とても大事なことだな、と感じているところです。十分な答えにはなっていないかもしれませんが、何かの役に立てば幸いです。」
- ・「遠く離れた福岡で、福島を心配して行動していただいていることに大変感謝いたします。よく、『モルモットみたいでイヤ』という県民もいるようですが、不幸にも初めての事故です。今回のことで、十分検証、研究がなされ、将来につながれば…と思っています。」
 - ・「これまで気持ちや考えを吐き出す場が少なく、支離滅裂に書いてしまいました。申し訳ありません。子どもの体や心についてのアンケートはこれまでもありましたが、母親の話、気持ちを問われることは少なかったように思います。このような機会を与えていただき感謝します。」

10.2 2014年

2014年のアンケートに関しては、①「アンケート不快感」が30件、②「アンケート協力的な意見」が60件、③「意見・要望」が9件あった。

アンケートに不快感

- ・「原発関連のアンケートがくる頻度が高いです。アンケートをまとめている企業・団体が違うのはわかりますが、アンケートにも時間がかかって手間なので、改善してほしいです。同じ質問も避けて下さい。」
- ・「こんな調査して、何の役に立つのかな？と思う。災害の事、原発の事、忘れていたのに、また思い出して書くというのは、気分が良いことではない。このような調査で、余計に不安になってしまう親が多いのではないのでしょうか？」
- ・「収入については収入や学歴で子どもがガンにでもなる事をそう定めているとして感じとれませんでした。最初からこのアンケートじ

たいが上から目線のような感じ。福岡と遠くから文書で何だかんだと言うならば、福島県に住んで健康プロジェクトを考えてほしいと、本当に願います。」

- ・「失礼な発言だとは思いますが、毎回、モルモットという文字が頭をよぎります。このようなアンケートに答え、どの程度、社会は理解してくれるのだろうか？どの程度、情報を発信してくれるのだろうか？ちょっと疑問に思います。おそらく将来まで続くであろう、このようなアンケート。子供がある程度、大きくなり、自分のことをこのようなアンケートされると分かった時のことを思うと心が痛みます。」
- ・「今回のアンケートもこまかい項目が多く、やはり家計や収入、雇用形態は記入する必要があるのか？」
- ・「母子手帳を交付された方には、度々アンケートのようなものが届くのですが、出産できなかつた私にまで届くので、毎度、不快な思いをさせられます。」

アンケートに協力的な意見

- ・「今回、調査票と同封されていた Q&A 方式の回答書で『自分達が“モルモット”にされている気がする』という記載がありました。3年前の原発事故後、数ヶ月経過してから、県より3月11日以降の生活を事細かに書くよう、厚い冊子が送られてきた時は、本当に自分達が、被爆者として実験台にされているような気持ちになりました。しかし1年2年と時が過ぎる中でその受け止め方にも変化が出てきたと感じています。近い将来、私や私の子ども達に、低線量被爆による健康上の問題が起きるかもしれません。とても不安ですが、それでも私達はチェルノブイリ原発事故の経緯を踏まえ、内部被曝を最小限に抑えたり、甲状腺の検査を受けることができています。もし、数十年後、再び何処かで原子力災害が起こった時、私達

のデータが何らかの形で役に立てばいいと思います。」

- ・「時々、放射能の事は忘れていきます。このままだと、自分や子供の健康管理（放射能に対する）がおろそかになるかもと少し不安になる事があります。健康診断や検査は、ずっと続けていってほしいと思います。このアンケートも、忘れていた時に届いたので放射能について気を付けていかなければと思いました。」
- ・「自分でも我が子たちにこの思いを伝え、伝わってほしいと願いますが、こうして、プロジェクトを、立ち上げた皆さまには調査に関わった子ども達が成人し、悩み迷った時に私たち世代の覚悟を、メッセージを福島へ日本中へ、世界中へ伝えていただける何かを形に残してほしいと思います。そうであれば、協力したいと思ひますし、意義のある事だと思ひます。モルモットではない私達は決してアンケート結果だけを残すことを望んでいません。声を発信する方法のない私達、子ども達の為に、代わりに社会へ・・・どうぞよろしくお願ひ致します。」
- ・「他の母親達や子供達の事が知れて嬉しいです。また、このように私達に視点をあてて頂きありがたく思ひます。今後も私達の声や現状を社会に届けていって頂けたら、福島の未来に明るい兆しが見えてくると思ひます。」
- ・「仕事柄ですが、プロジェクトと関わる親子の方々の繋がりが大きなものへと育っていく事へも感動をしています。」
- ・「長期にわたり調査、サポートいただきありがとうございます。どうなっていくのか誰もわからない中、このようにデータを残すことは大事なのだろうと思ひます。協力できることがあればと思ひ、できる限りのことはやっていくつもりです」
- ・「前回同様、書いていて辛い気持ちにもなりましたが、このアンケートが福島の子供達を救う手立てに役立つと信じて、答えさせていただきました。このアンケートの対象には当時地元福島でとても親し

くしていた娘の同級生達も含まれていると思うだけで、1人1人の顔が浮かび3.11前の楽しかった交流の日々を思い出し胸が痛みます。私達に救いはあるのでしょうか？あの日以来灰色の空の下で生きています。どうぞこれからも寄りそっていただきたく願うのみです。よろしくをお願いします。」

- ・「研究のためとはいえ、こんなに詳しく原発事故による心理的な影響についてきかれたり、答えたりする機会は一度もありませんでした。調査内容に答えていくうちに心の中が整理でき、自分がすべきことが見えてきた気がしていました。このような調査をしていただいたこと、ありがたく思っています。」

意見・要望

- ・「原発事故後、色々なアンケートに回答させて頂く機会が多くなり、アンケートに回答する度、1つ思う事があります。うちの子は、原発事故での放射能での不安よりも、地震の揺れや、地震が起こる前の地鳴りに恐怖や、不安を抱いているようです。放射能と言う目に見えない物への不安もあるのは確かですが、3.11の大きな地震を体験した小さな子どもたちが地震に対する不安を少なくしていく事も大切だと思います。私自身、他のお子さんが地震に対する不安をどのくらい持っているのかも知りたいです。」
- ・「前回アンケートにお答えしていた時も感じた事ですが、「～ヵ月後、～年後」などという時系列での回答には無理があるなあ、という印象です。～ヵ月たったから、～年たったから、という事だけで回答が変わるという事はありません。前回の回答と今回の回答が違うのは単に季節のせい、あるいは気分のせい、だったりします。私達は日々、生活しています。「昨日の誰かとのケンカ」とか「今日の天気」とかが影響してたりします。同じように、原発事故の影響等についても、～年。～ヵ月とたったからといって単にその時間の

経過だけでは変化は計れないと思います。メディアの報道等で不安をあおられれば、私達は実際には何年たつていようとすぐに、事故直後の不安な気持ちに引き戻されます。」

- ・「質問中にあった『保養』という言葉にはどうも違和感というか、抵抗感があります。学校や保育所の知り合いでそういう語を使う人を知りません。一部の方はよく使うようですが、どうも、私たちの街が危険視されているようで、嫌な気持ちにすらなります。(問12については『ない』にしました。ただの旅行なら行きますが。) ・親の心身の状態ですが、放射能の影響を問う質問(問14)について・・・。放射能なんかよりも、一部のメディアやweb上の方々の嫌がらせや差別の方がよほど(特に)メンタルへの影響がでくると思います。そういうモノの調査はしないのでしょうか。」

11 考察

1 各項目の回答数

下記に示す分類項目の回答数は絶対数ではなく、あくまでも読み手の主観によって数え上げられた数字である。2013年調査と2014年調査の間の「変化」を捉えるために、参考までに回答数を示している。

	2013年	2014年
1 生活拠点	233	214
(1) 避難関係	155	66
ア 避難継続中	49	16
イ 避難したいが戻ってきた	35	9
ウ 避難したいができない	68	37
エ 避難しない	3	4
(2) 保養関係	37	40
ア 保養プログラムの拡充を望む	33	33
イ 保養に関する情報を得たい	3	6

ウ 保養に満足した	1	1
(3) 除染関係	41	108
ア 除染にある程度満足している	2	9
イ 実施された除染に不満がある	10	16
ウ 除染を望む	24	74
エ (実施の有無にかかわらず)除染の効果に疑問がある	5	9
2 食生活	72	49
(1) 食	66	45
ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない	44	32
イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている	10	2
ウ 学校(保育園)給食に対する不満	12	11
(2) 洗濯	6	4
3 家計	39	53
(1) 収入	10	4
(2) 支出	29	49
ア 避難・二重生活の費用	1	1
イ 放射能対策費用	4	3
ウ 外遊びの代わり	6	4
エ 他県産の食材・水の購入費用	12	30
オ 租税、公共料金	3	8
カ 保険	3	1
キ 住宅費用	0	2
4 子育て	267	136
(1) 遊び	171	97
ア 外遊びをさせている	29	15
イ 外遊びを制限している	74	39
ウ 室内遊び場	68	43
(2) 放射能対応	55	23
ア 子どもの検査	52	18

イ 積算計 (ガラスバッジ)	3	5
(3) 出産	11	8
ア 妊娠	10	6
イ 流産	1	2
(4) その他	30	8
5 人間関係	114	59
(1) 夫婦・親族	9	9
(2) 近所・知人	16	13
(3) 外部	79	29
(4) 避難・賠償の取り扱いに差異のある人	10	8
6 情報	102	38
(1) 情報の収集	82	24
ア 情報不信	62	10
イ 関心の低下	20	14
(2) 情報の発信	20	14
7 賠償・補償	121	150
(1) 賠償	64	80
ア 賠償の打ち切りに対する不満、子どもの将来の損害に対する賠償	46	22
イ 賠償の対象、範囲の線引きに対する不満	18	58
(2) 社会保障	11	23
ア 子どもの健康	7	11
イ 家計負担	4	12
(3) 租税	12	8
(4) 対応全般	34	39
ア 行政の対応に対する不満	19	21
イ 東電の原発事故対応に対する不満	6	7
ウ 原発事故を踏まえた原発の是非	8	10
エ 寄付金の用途に対する疑問	1	1
8 健康	79	36
(1) 子ども	57	23
(2) 親	22	13

2 2013年調査から2014年調査への全体的な変化

まず、生活拠点に関しては、2013年調査と比較して、避難継続中の人のうち、肯定的な意見が増え、同時に、避難しないという決意を明確に示した人も増えた。もっとも、2014年調査においても、避難継続中だが苦境や困難を述べるもの、避難したが福島に戻ってきたもの、避難したいができないものは依然として多い。

次に、放射能に起因する様々な不安について。①子どもの健康に関して、2014年では、胎児の健康不安について、2013年調査からみられた「福島の妊娠または妊娠中を過ごすことについて不安を感じている」、「放射能が流産の一因となっている疑念を払拭できない」という意見のほかに、新たに「放射能が不妊に影響している疑惑をもつ」という意見がみられるようになった。②経済状況に関して、2014年調査では、支出について、新たに「住宅費用がかかった」という意見がみられるようになった。③人間関係に関しては2013年調査と比較して変化はみられなかった。④補償・救済も2013年調査と比較して変化はみられなかった。⑤情報に関しては、2014年調査は「情報不信」の回答数の減少が目立つ。これは「関心の低下」によるものと考えられる。⑥2014年調査は「賠償の打ち切りに対する不満」の回答数が減少し、逆に「賠償の範囲の線引きに対する不満」が増加した。2013年調査は賠償打ち切りの直後であったためその不満が反映されたが、2014年調査では賠償の線引きが一般に認知されてきたことにより「賠償の打ち切りに対する不満」が「賠償の範囲の線引きに対する不満」に変化したものと考えられる。

3 アンケートの数字からみる原発事故後の生活変化

(1) 生活変化

以上は本調査の自由記述に関する分析である。ここで、本調査の原発事故後の生活変化に関する問への回答を紹介したい。2013年調査及び2014年調査の回答（下記のグラフ参照）によれば、原発事故後の生活変化には

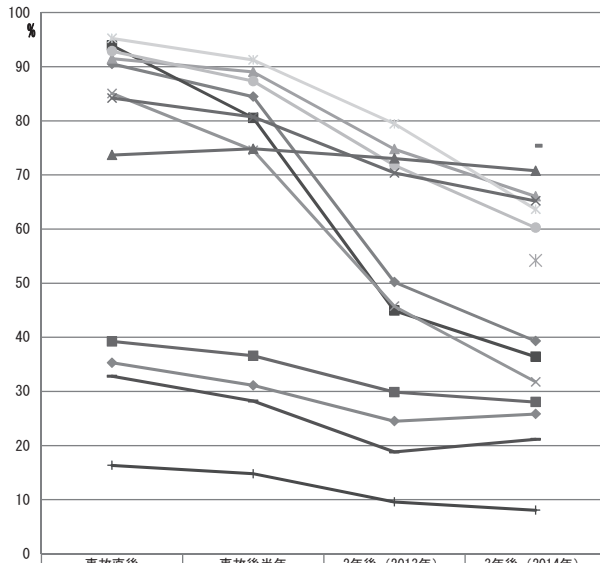
3つの傾向があることがわかった。

第一に、高い割合を維持したまま推移している項目があった。例えば、「補償をめぐる不公平感(原発事故の補償をめぐる不公平感を覚える)」、「経済的負担感(原発事故後、何かと出費が増え、経済的負担を感じる)」、「保養への意欲(放射線量の低いところに保養に出かけたいと思う)」、「健康影響の不安(放射能の健康影響についての不安が大きい)」、「子育ての不安(福島で子どもを育てることに不安を感じる)」である。

第二に、急激に減少している項目があった。たとえば、「地元産の食材不使用(地元産の食材は使わない)」、「洗濯物の外干し(洗濯物の外干しはしない)」、「避難願望(できることなら避難したいと思う)」である。ただ、「地元産の食材不使用」については、自由回答を見る限り、2014年調査でもなお不安を指摘する声が多く、急激に減少しているようにはみえない。また、「地元産の食材不使用」の背後にある「健康影響の不安」や「子育ての不安」については、数字データでも高い割合を維持している。したがって、「地元産の食材不使用」の減少は、安心を得たというよりもむしろ、関心の低下や経済的な負担等の別の要因に起因するのではないかと考えられる。

第三に、低い割合ではあるものの、減少せずそのまま推移している項目があった。放射能への対処をめぐる配偶者、両親、地域や周囲の人との認識のずれである。なお、放射能への対処をめぐる認識のずれは、地域や周囲の人との間にもっとも感じやすく、次いで両親、配偶者の順であることがわかった。原発事故後の生活変化、とりわけ減少せずそのまま持続している項目は、心の状態を不安定にさせる要因になると考えられる。

なお、2014年調査では「放射能に関してどの情報が正しいのかわからない」という情報不安について新たに調査したところ、この項目がもっとも高いことがわかった。加えて、回答者の5割以上が、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」と答えている。



	事故直後	事故後半年	2年後 (2013年)	3年後 (2014年)
◆ 地元の食材不使用	90.5	84.5	50.2	39.3
■ 洗濯物の外干ししない	93.9	80.5	44.9	36.4
▲ 保養への意欲	91.5	89.0	74.8	66.0
× 避難願望	85.0	74.5	45.7	31.8
※ 健康影響の不安	95.2	91.3	79.5	63.7
● 子育ての不安	92.9	87.3	71.8	60.3
┆ 親子関係が不安定	16.3	14.8	9.6	8.1
○ 情報不安				75.4
— 配偶者との認識のずれ	32.8	28.2	18.8	21.1
◇ 両親との認識のずれ	35.3	31.1	24.5	25.8
■ 周囲との認識のずれ	39.2	36.6	29.9	28.0
▲ 補償の不公平感	73.7	74.8	73.0	70.8
× 経済的負担	84.2	80.7	70.4	65.2
○ いじめや差別への不安				54.2

* 事故後の生活変化(「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計割合)

(2) 子供の外遊び

次に、子どもの外遊び時間の変化に関する数字データを紹介したい。

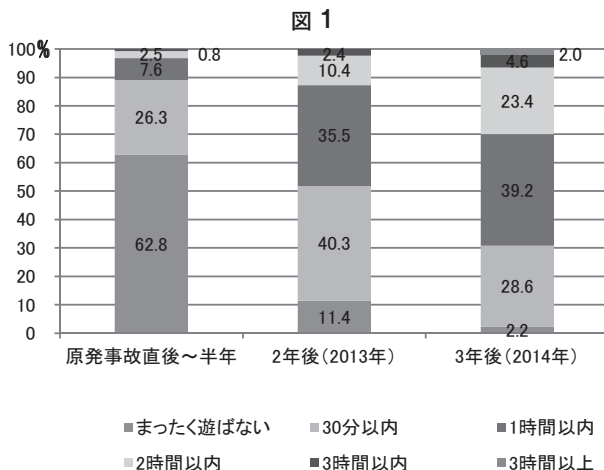


図1は、子どもの外遊び時間の推移を示したグラフである。外で「まったく遊ばない」という子どもは、事故直後から半年は62.8%であったのに対し、2年後は11.4%、3年後は2.2%と大きく減少しており、外遊び時間は増えてきたことがうかがえる。

一方、東北地方A市の幼児を対象とした渡辺悦子らの調査（『幼児の平日の外遊び時間とテレビ等視聴時間に影響する家族環境と近隣環境』『運動疫学研究』2012年）によれば、外遊び「1時間以上」が4歳児で75.4%であった。これに対し、本調査によれば、「1時間以上」は30%であった。他地域に比べて外遊び時間はまだ短いといえる。

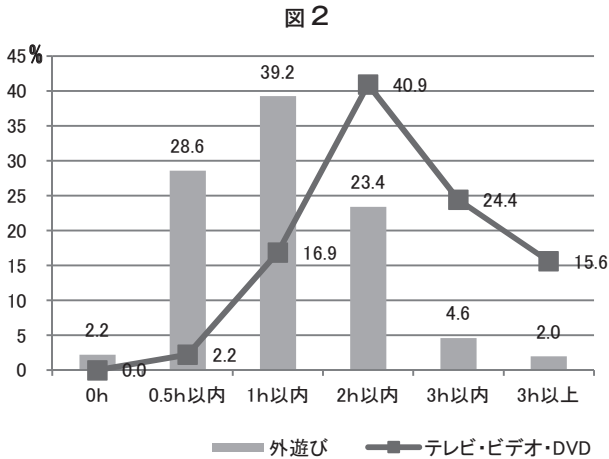


図 2 は、2014 年調査のうち、外遊び時間とテレビ・ビデオ・DVD 等(以下「テレビ等」)の視聴時間を示したグラフである。テレビ等を視聴する時間としてもっとも多いのは「2時間以内」の40.9%である。

上記の渡辺悦子らの調査によれば、テレビ等の視聴時間が「2時間以上」の割合は4歳児で55.6%である。これに対し、本調査によれば、その割合は40%である。福島県の子どもは外遊び時間が減ってテレビ視聴時間が増えていると危惧されていたが、本調査ではそのような傾向は確認できなかった。

最後に、自由回答欄に記入した人の「子どもからみた統柄」、「回答者が母親の場合」の年齢層と居住地の内訳を示した。なお、「調査回答者」とはアンケート調査に回答した人を指す。

第1回調査自由回答記入あり件数： 1203件(総回答数2627件) = 45.79%	第2回調査自由回答記入あり件数： 707件(総回答数1602件) = 44.13%
合計文字数：252,047字	合計文字数：152,707字
一人当たり平均文字数：209.5字	一人当たり平均文字数：215.9字

【続柄】

続柄	第1回調査(2013年)			第2回調査(2014年)		
	自由回答 記入者	調 査 回 答 者	記入割合	自由回答 記入者	調 査 回 答 者	記入割合
母	1195	2594	46.07	681	1524	44.69
父	6	23	26.09	22	71	30.99
祖父	0	1	0.00			
里親	1	1	100.00	1	1	100.00
祖母	1	7	14.29	3	6	50.00
曾祖母	0	1	0.00	0	0	0.00
全体	1203	2627	45.79	707	1602	44.13

【回答者が母親：年齢層別内訳】

年齢層	第1回調査(2013年)：2594人			第2回調査(2014年)：1524人		
	自由回答 記入者	調 査 回 答 者	記入割合	自由回答 記入者	調 査 回 答 者	記入割合
20代	161	463	34.77	53	158	33.54
30-34歳	414	924	44.81	203	504	40.28
35-39歳	433	853	50.76	258	541	47.69
40代	179	342	52.34	162	310	52.26
50代以上	1	1	100.00	0	1	0.00
無記名	7	11	63.64	5	10	50.00
計	1195	2594	46.07	681	1524	44.69

【回答者が母親：居住地別内訳】

市町村名	第1回調査(2013年)：2594人			第2回調査(2014年)：1524人		
	自由回答 記入者	調 査 回 答 者	記入割合	自由回答 記入者	調 査 回 答 者	記入割合
福島市	428	877	48.80	237	503	47.12
桑折町	22	34	64.71	13	21	61.90
国見町	15	27	55.56	8	12	66.67
伊達市	68	174	39.08	45	109	41.28
郡山市	464	1062	43.69	250	599	41.74
二本松市	79	169	46.75	47	104	45.19
大玉村	15	41	36.59	10	26	38.46
本宮市	55	124	44.35	30	76	39.47
三春町	12	34	35.29	6	15	40.00
9市町村外	37	52	71.15	35	59	59.32
計	1195	2594	46.07	681	1524	44.69

付記

調査にあたって協力いただいた福島県中通り9市町村の親子ならびに後援をいただいた市町村・新聞社・団体の関係者にお礼申し上げる。また自由回答の入力ならびに分析作業をサポートしていただいた柴尾知宏、吉原由樹、落合玲奈、井上美紀の各氏に感謝申し上げたい。本稿は筆者に加えて、阪口祐介、守山正樹、永幡幸司、高木竜輔、田中美加の各氏との共同研究に基づくものであり、科学研究費・基盤研究(B)「原発災害における母親のリスク対処行動の規定要因の探索と支援策についての研究」、同基盤研究(C)「災害ストレスに脆弱な母子に対する心理社会的支援とそのためのシステム構築」、2014年度中京大学特定研究助成「原子力市民防

災害の構築：福島とチェルノブイリの教訓を未来へ」による成果の一部である。なお、福島子ども健康プロジェクトの研究目的、速報値、新聞報道などに関しては次のホームページを参照されたい。(http://mother-child.jpnowellness.com/)

〔注〕

- 1 成元哲・牛島佳代・松谷満, 2014, 「1,200 Fukushima Mothers Speak : アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」, 『中京大学現代社会学部紀要』8 (1) : 91-194 を参照。

〔文献〕

- 松谷満・牛島佳代・成元哲, 2013, 「福島原発事故後の健康不安・リスク対処行動の社会的規定因」, 『中京大学現代社会学部紀要』, 7 (1) : 89-108.
- 松谷満・牛島佳代・成元哲, 2014, 「自治体別に見る福島原発事故後の意識と行動：福島子ども健康プロジェクト2013年調査報告」, 『中京大学現代社会学部紀要』, 7 (2) : 151-174.
- 松谷満・成元哲・牛島佳代・阪口祐介, 2014, 「福島原発事故後における『自主避難』の社会的規定因：福島県中通り地域の母子調査から」, 『アジア太平洋レビュー』, 12: 41-47.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満, 2013, 「終わらない被災の時間：原発事故後の福島県中通り9市町村の親子の不安、リスク対処行動、健康度」, 『中京大学現代社会学部紀要』, 7 (1) : 109-167.
- 成元哲, 2014, 「放射能災害下の子どものウェルビーイング：福島原発事故後の中通りの親子の生活と健康調査から」, 『東海社会学会年報』, 6: 7-24.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満・阪口祐介, 2014, 「放射能災害下の子どものウェルビーイングの規定要因：原発事故後の福島県中通り9市町村の親子の生活・健康調査から」, 『環境と公害』44 (1) : 41-47.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満, 2014, 「1,200 Fukushima Mothers Speak : アンケート調査の自由回答にみる福島中通りの親子の生活と健康」, 『中京大学現代社会学部紀要』8 (1), 91-194.
- 牛島佳代・成元哲, 2013, 「育児支援ネットワークと母親の健康に関する日韓比較研究」, 『中京大学現代社会学部紀要』, 7 (1) : 59-88.

牛島佳代・成元哲・松谷満, 2014, 「福島県中通りの子育て中の母親のディストレスの持続関連要因：原発事故後の親子の生活・健康調査から」, 『ストレス科学研究』 29, : 84-92.